

特 253

307

桂利劍著

教行信證註解評林



始



特253
307

教行信證註解評林

桂 利 劍 著



第 壹 篇

第一章 題 號 釋

「願淨土眞實教行證文類序」六要に據るに、淨土眞實教行證は所釋、「顯」と「文類」は能釋と曰ふ。淨土眞實教行證を顯すの文類と讀むべきである。能釋は七祖の功にして、其の本を推せば釋尊の眞教、其の淵源を尋ねれば願心莊嚴である。而して此の光明の流に投ずるもの、之を高祖と爲す。我等より之を見れば、見眞大師の法身の光明なるものである。

「淨土眞實」とは、淨土眞宗である。一眞宗を光顯するところに、假權自ら掃除せらるゝもの、本願一乘絶對不二の教なるものである。彼の聖道の如きは、之を要門假門の法として、眞假明斷のところ、自ら之を簡去す。聖淨二門

教行信證註疏評林



の廢立と、外教邪偽異執の教誡とは、化身土卷に於て明すものは是れである。眞佛弟子の釋下に在つて、己に其の幽意を見る。

三法四法の法門は「法雷」に出すが如し。

六要に「假權」と曰ふ。是れ眞假明斷の體を知らしむるもの、大權の筆致、仰ぐべきである。

評林

一 樹心錄 卷一の

文見るべし。「顯」の字を以て、一に高祖に屬し、二に如來及び列祖に屬せしむ。私に思ふに、顯明の功は高祖の自ら居るところに非ざるべし、第二義にして足る。(然れども龍谷の流を汲むもの、仰いで高祖の能顯と爲すは可である)

又聖道に對するの淨土、要眞に對するの眞實と爲すもの考ふべし。文字を解するは可なれども、法門を解するに二重の相對を爲すは祖意に非ず。

何となれば、一眞宗を光顯するに彼の假權を簡ぶのみ。六要に釋して「眞實と言ふは是れ假權に對す」と曰ふものは是れである。例せば信卷の眞佛弟子の釋の如し。權實は通判である、眞假は別判である。聖道を權門と爲し、要門を假門と爲す。聖道權假と云ふが如きは、聖道法を以て假門の體と爲すのみ。特に假權と云ふもの、最も此の義を知ら

しめんとするものである。「淨土眞實」とは、淨土眞宗と云ふが如し。絶對の法門茲に彰る。先輩皆之に雷同して六要の釋を輕視せるも、大權の筆致は深く思を致さざれば幽意を窺ひ難し。後學之を愼しめ。

本典は眞假明斷の書である。眞假明斷は廢立を極成せしむるものにして、願海に在つて之を決す。聖道及び外教の如きは從つて廢せらる。化身土卷に於て之を明すは、眞佛弟子の釋より來るものである。二門廢立の書に非ず、眞假明斷の書である。此の大綱を得て本願一乘絶對不二の教を見るべきである。

又三法立題と四法立題を論ずるを見るに、但だ「諸家共許の標目に就く」と云ふは徹せず。特に「行の言は信を攝す」と云ふのみにては、法門未だ明らかならざれども、元祖法門と爲すは疑ふ餘地が無い。今家の先輩皆此の類にして、唯だ法雷轍のみ此の誤を踏襲せず、法雷見るべし。元祖法門は觀經法門である、高祖法門は大經法門である。教行信證に題するに、觀經法門の立題を爲して可ならんや。

二 略 讚 卷一の

正信偈の「顯大聖興世正意」の文を引いて七祖の能顯と爲すは可なるも、「夫れ眞實の教を顯さば」(教證二)等の文を引いて高祖の能顯と爲すは、必ずしも高祖自ら許すの證とならず。「眞宗の證を鈔し、淨土の要を摭ふ」(化土卷五四十二)の文は、類文として自ら安んじたまふものにして、却つて立義の反證を爲さんのみ。顯を七祖に譲り、類集を以て自ら居るは高祖である。

「六要も亦此の義に同じ」と云ふは考ふべし。六要は但だ「能釋」と爲すのみ。即ち文類なる故である。文は是れ

能釋である、而して佛祖の文ならずや。佛祖の能釋、能顯ならざるべからず。教行證を顯すの文類である。教行證文類を顯すと云ふは、題目としてをかし。先輩多く此等の説を踏襲す。已下煩しく評破せず。

「淨土」を以て「聖道門に對するの言」とのみ解するは樹心に同じ。此の義は後序の文より考へつきたるのみ。後序の文の三法は、願心莊嚴の法門なるが故に三時通入し、聖道は依心起行の法門なるが故に三時興廢あることを言ふのみ。願心の法門は三法圓具の妙行、法體成就の三法なることを知らざるものである。

三法圓具の妙行と觀經の行中攝信の建立と、法門に本末あることを論ずるは法雷轍のみ。後學茲に著眼せよ。先輩多く、三法門と云へば必ず行々相對の法門とのみ思ふは、是れ大信海の法門に徹せざる爲である。

略讀は略典を以て己が義を飾るのみ。略典亦、三法は法體成就門、四法は機受趣入門である。必ずしも觀經法門に非ず。(勢に乗じて邪路に踏み入るもの大法門眼を失ふ。懼るべし。)

三 述 開 一〇一

顯彰、顯開、開顯、顯示の文を引證し、又光顯と顯示とを以て七祖と高祖に配するは思ひ難しと云ふは可なれども、是れ唯だ熟語を出すのみ。六要の顯明にて足る。

「集主に別顯無し、佛祖の顯を以て其の顯と爲す。」と云ふもの可、吾が意を得たり。

「淨土」を釋して、華嚴、大品に對するもの可である。

「眞實」を釋するに、權實の判、終南より來るとするもの、亦可である。

又三法を釋するに我が願心莊嚴を以てするは可なれども、「通に就きて別を論ず」と云ふは未だ可ならず。三法門必ずしも通門に非ざるが故に。

眞言宗の徒、「特に此の經を留めて、止住すること百歳せん」(大經下三十三)を嘲ひて、法身常住の説法を誇る、亦擔板漢のみ。眞宗も亦「今現在説法」(小經二)を説く。是れ光壽海に在つて論ずるものである。機感相應は時機を捨て、可ならんや。三時興廢は時機を論ずるのみ。光壽海の一立古今然を捨つるに非ず。彼の法身説法は、但だ法身の大小のみ能く之を聞くことを得るものにして、密に蘭林遊戯地門の自内證を言ふのみ。現代の青年學徒、之を考ふべし。

(眞言教徒の執見、見るべし)

(石泉に來つて宗義稍明らかとなる。努めたりと謂ふべし)

四 徵 決 卷一の一

「此の典に於て正しく能く顯すものは集主也。」と云ふは、教卷(首)に「夫れ眞實の教を顯さば」と言ふ文に據る。又證卷(首)に「謹んで眞實の證を顯さば」と言ひ、眞佛土卷(三十二)に「今眞佛眞土を顯す」と言ひ、化土卷本(十七)卷に「己に眞實行の中に顯し畢んぬ」と言ふに據る。若し功を本に推れば、則ち釋迦、七祖を能顯の人と爲す。故に行(三十九)に言く。行の一念と言ふは、謂く稱名の偏數に就いて選擇易行の至極を顯開す又信卷末(也)に言く。一念とは斯れ信樂開發の時尅の極促を顯す。此れは是れ釋迦、彌陀の本願に依りて眞實の行信を顯開する也。又行卷の偈に言

く、大衆興世の正意を顯す^ス。此等の文、若しは總、若しは別、七祖、二尊の意に依りて眞實四法等を顯し云云」と。文を擧げて辨ずるところ親切である。然れども題號は自ら居らざるものなること上に辨ずるが如し。

「題目の顯の字の指す所、正しく集主に在り。」

「淨土」を所宗に約するの義可である。法雷轍も亦之に同じ。

「眞實」の釋無し。

「方便を指して方便と稱し、眞實を反顯す」と云ふは可し。從假入眞の法を釋すること、從假入眞の如くせざれば、從假入眞の功を成せざるは終南である。而して之を以て果遂の顯益を欣ぶは高祖である。然れども從假入眞の本書に非ざるが故に、之を化身土卷中に置きて眞假明斷するは高祖である。明斷は法に就き、入眞は機の前にのみ在り。入眞を勧めずして、廢立を先とするは元祖である。高祖の稟承茲に在り。故に廢立を至極せんが爲に眞假を明斷す。之を辨ぜざれば一部の綱格を大觀することは出来ぬ。

行中攝信を釋するに、禮讚の文を擧げて例と爲すもの、馬脚を露すのみ。

六要の遠果、近果を立つるを與門と爲し、六要三^{（前未考）}の「往生と成佛は始終の益なり」と雖も、時に前後無し。是れ同時なるが故に。」の文を引き、之を仰ぐもの可し。

始終兩益は樂集下^{（三）}に在り。樂集上^{（下）}に相土と無相土の説有るも未だ分明ではない。今日の西鎮の徒皆之を知らず。六要に與あること宜し。輕々に論する勿れ。

五 對 問 記 一の一

遠公、對問記に序して「六要の大醇、亦未だ小疵有るを免れず、況んや其の他に於てをや。斯の編の若きは、則ち白璧の美なる者也。」と云ふ。

叙曰く、遠公は剛健の士、而も猶此の言有つて、中宗の誠を破るは、是れ偏するものである。我黨の二三子、末學の妙と大權のものせられたるものと、玉石混同するなくんば幸である。之を誡めよ、之を愼めよ。

他力の妙行を顯して「六字の法體に願行具足す。故に唯だ南無阿彌陀佛、是を大行と爲す。行卷に曰く「無碍光如来の名を稱す」と。然るに稱に機功無く、名、常に稱を具す（此れ些か隠ならず。何となれば、波は必ず水を體と爲すも、水は必ずしも波を立てず、一念往生之に由つて明らかである。信は必ず名を具す、名は必ずしも信を具せずと云ふ。「名、常に稱を具す」とは聖教の指南無し。）終日稱名すれども唯だ是れ名號なり。能稱功無きが故に。六字の法體、即ち是れ能行、即是其行の故に。不行にして行じ、行じて不行なる、是を他力の妙行と名く。故に曰く「是れ凡聖自力の行に非ず、故に不同向の行と名く」と。機法一體、能所不二、唯だ是れ一箇の南無阿彌陀佛、是を他力回向の大行と爲す」と。

叙曰く。能所不二、機法一體を以て能行即所行を論するは從來の説の如し。而して稱名を教位とし、信心を機位とするは月殊師の行信論である。就行立信より脱化し來れるものにして、是れ攝末の始に據して行卷を見るも、歸本の終に徹せず、大信海の法門に徹せざるの恨みがある。

「四法立題は具さに真宗の教相を標し、三法立題は教義の邊に約し、信を行に攝して外、聖道に對する也。」と云ふ。「顯」を釋して、顯明に高祖にして、功を本に推ると云ふは、稍良し。「淨土眞實」を解するも、從來の説の如し。之を二重に見るは、未だ六要の深致に達せざるものである。「教等の三法は、是れ所信の教義、大信の一法は、是れ能信の安心なり。彼の安心に對して、以て教義を標し、教行證文類と言ふ。」と云ふ。是れ大經法門に非ず、知る可し。未だ徹せず。下、具釋するところを、檢討するに、大信心の行信を知らざるの失のみ。

六 敬 信 記 卷一の二

「顯」の釋義、別義無けれども、諄々として親切である。師の學風思ふべし。

「淨土」を釋して「通即別」と云ふ、盡是法王家の義歟。盡是法王家として釋すると、諸佛淨土を簡ぶとの二意有り。何れを今の意とするか、考ふべし。六要主は通を捨て、別を取る。師の意は、言通意別を謂ふ如し。分明ならず。因據不十分である。

「行」の釋、片鱗を露す。

三法の釋は一宗の常識のみ。されど辯ずるところ丁寧である。

能行と所行の論を述べ、能行説に對する難を擧ぐ。善護師の意據を見るに足るも、其の難、必ずしも當らず。所行説に對するも然り。之に答ふるに、「能所不二、鎔融無碍」の義を立つ。是れ師が一代の心血であるが、石泉説より

脱化し切れざる不徹底の遁辭である。余が「行信論」中に辯ずるが如し。

念佛往生とは、「他力の信に住して稱へる念佛の行者、證果を感ずると云ふことなれば、因をきめて見れば、稱へる相の處に非ず、他力の信に住したる信心が因體を受け持つてをること明白なり。」と云へるもの、宗義には害無しと雖も、終、吉の念佛往生を解するの義には徹せず。稱名破滿下の轉釋は、人を指すに非ず、法を轉ずるものである。知る可し。

六要の「所依所修所得」の文に著眼しながら、能依能修能得の信なるを知らず。故に所修と言へば、念佛行と解す。「敬信教行證」の文に照應せず。

六要に二義有り。「行信能所機法一也」(六要科第二新本十)と云ふ。影略互顯である。大意も亦其の意を得て居る。思ふに、攝末の始に就けば、所修は念佛である。歸本の終に就けば、所修は名號である。

而して大信心は唯信の一法あるのみ。之を本願一乘絶對不二の機教と言ふ。

先輩未だ之を達觀せず。是れ評論安息の處に到達せざる所以である。

七 詮 要 一の二

「教を能詮とし、行證を所詮とす。乃至教とは、大無量壽經なり」といふ。行門の教は觀經である。大經は、「本願成就一實圓滿の眞教眞宗是也。」(信末四)唯信正因の風のみ。下に、行とは衆生の稱名を指して之を行と云ふに對照して、此の師の淺見を知る。論註に據つて其の體を定めたるを云ひながら、眞實功德相を知らず、功德の大寶海に歸

すべきの祖意に徹せざるものである。

兩重因縁を引いて具信の行と釋す。何ぞ知らん、兩重因縁は、攝化は是れ唯信に歸せしむる義を顯すを知らず。初重何ぞ能行ならんや。文に照らして知るべし。

衆生の稱名は諸佛の所讚と云ふもの明らかならず。十八は即是其行の南無同彌陀佛にして、諸佛之を能讚するのみ。是れ本願成就に非ずや。本願成就は、衆生の稱名として之を讚嘆するに非ず。成就の外に眞宗の安心有りや。

汝、佛名を稱するが故に、來つて之を迎ふ、と云ふは觀經のことである。此等の義は、大信海の法門に暗きより來る。下に眞實信心の稱名云々の文を引いて之を立證す。行門の義を以てのみ能讚とするや、をかし。

三法門の義は、終南、吉水の法門を相承したまふ、謂はゆる就人、就行立信の釋是れ也、と云ふ。此の攝末の始に就いて、歸本の終に還ることを知らぬもの、此の師の病源である。先輩皆之に類す。

(附)眞言教徒の觀覽觀

観曰く。宗門人には僻執が有る。内證冷然を知らず、機解各別なるものは大乘ではない。大心海の莊嚴を見ざる眞宗學徒も皆之に類す。嘲ふべし。

我國の靈界に新生命を齎した偉人は、宗教史上多々有れども、弘法大師の右に出づる者は無い。直截簡明にして、未來を主とせるは觀覽の特色である。眞率熱烈に、現世を主とせるは日蓮の特色である。併し觀覽は悲觀に傾き、攝取に偏す。日蓮は排他に傾き、折伏に偏す。天空海淵、現世にも未來にも偏せず、攝取にも折伏に傾かざるは、弘法大師の特色である。と云ふが眞言教徒の見である。

観曰く。大攝取光の振蕩するところ、折伏自ら成るが徹底的である。三世なるものは一念正覺のところを超えるが本願一乘である。彼等の見るところは淺い、但だ一面の宗風を門外より見て誤るのみ。

密教は法身常恒の說法にして、自受法樂の法門なるが故に、隨機說法の法門たる顯教の如く三時衰變が無い。大師の梵網經の開題に「入法は法爾なり、興廢何れの時ぞ。機根絶々たり、正像何ぞ分たん。」と、法爾の教法なるが故に、正像末の三時を分たず、教行證、常に具足せることを述ぶ。大無量壽經に「止住すること百歳せん」と説くは、心細き慈悲、哀感なり云々と云ふは、眞言教徒の主張である。阿彌陀經の「今現在說法」は兩の主張するところと同じ。されど、凡夫の機の上に三時無しと云ふは、現實を見ざるのみ。

第二章 撰 號

「愚禿釋觀覽述」六要に曰く「將に此の文を釋せんとするに、大に分つて二と爲す。第一に題目を釋し、第二に正しく文を解す。初の中に又二。先に題目を釋し、次に撰號を解す。」と。

六要に題目を釋するに、先づ題目を釋し、次に撰號を解すと曰ふ。上已に題目を釋したれば、今撰號を解せんとするに、六要の釋に盡きたる歟。見るべし。

「愚禿」を釋して、

樹心錄(卷一)の二に「此れ左遷の改儀を示すに似たりと雖も、其の實は即ち尋常の意許にして、本願の正機を顯さんと欲する也。」と云ふ。「尋常の意許」と云ふは可し。「本願の正機を顯さんと欲す」と云ふは考ふべし。六要に「卓謙

の詞」と爲すもの穩當である。

又徵決(卷一の三十)に「此の稱、間に本願の實機を標す。即ち是れ信機の相也。」と釋するもの、樹心録よりも好し。愚禿鈔上(初)に「賢者の信を聞きて、愚禿が心を顯す。賢者の信は、内は賢にして外は愚也。愚禿が心は、内は愚にして外は賢也。」とのたまふ。

又選擇集の三心章に、終南の至誠心釋を解して(上四十三)「外に賢善精進の相を現じて内に虚假を懷くとは、外は内に對するの辭也。謂ふこゝろは、外相、内心と訓はざるの意、即ち是れ外は智にして内は愚也。賢は愚に對するの辭也。謂ふこゝろは、外は是れ賢にして内は即ち愚也。善は惡に對する辭也。謂ふこゝろは、外は是れ善にして内は即ち惡也。精進は懈怠に對するの辭也。謂ふこゝろは、外に精進の相を示し、内は即ち懈怠の心を懷く也。」とのたまふ。是れ我等が機の實相である。此の機實を粉飾して、自ら賢善精進にして、外に至愚の相を現せんとするは、猶ほ凡夫畫水の迷心である。要門の機は茲に凝滞するものである。元祖の次に「若し夫れ外を翻じて内に蓄ふれば、祇だ應に出要に備ふべし。」とのたまふ文も、彼等の眼に映寫し難からん。此の機は亦「若し夫れ内を翻じて外に播く者は亦出要に足りぬべし。」とのたまふ文も、凡夫畫水の迷情を捨て切らざるものならば、外に播くこと能はずして、賢善精進を借らんとするものである。元祖の語は緩にして、意は急なることは、至聖の言と仰がねばならぬ。之を我等の前に鮮明ならしめたまふものは高祖である。

「外を翻す」とは「外に賢善精進の相を現することを得され、内に虚假を懷けばなり。」の終南の釋意を得たる人のみにある。「内に蓄ふる者」は、必ず應に如來の至誠心のみであらねばならぬ。佛智圓照の機實、法實に稱ふもの、

是れ他力金剛心である。内外不調の粉飾がある苦は無い。機相は是れ内愚外賢である。信徳は是れ内賢外愚である。而して内を翻じて(自力を捨てる)外に播く(法徳自然)と云ふは、皆是れ如來の爲さしめたまふところである。香光莊嚴が是れである。香光莊嚴は如來の恩徳であつて、内愚外賢の機實を知るものにして、内賢外愚の信徳は自ら顯るべきである。凡夫畫水の迷情を粉飾して、内外不調無からしめんと欲するものは自力の人である。又自ら捨て、顧みず、無慚無愧の生活に安ずるものは邪見の徒である。我等には毫も殊勝らしきところは無きも、唯だ他力廻向の信心の殊勝におはしますのである。之を覆ふの貪瞋二河、臨終の一念に至るまで消えず、失せず、斷へされども、知らず(常行大悲の徳に稱ふは、亦何等の不思議ぞ。「彌陀の身心の功徳、法界衆生の身のうち、こゝろのそこにいりみつ」とは、「領解の心中をさしてのことなり」(御一代開書十條)との中宗の御法語、深く味ふべきである。之を要するに、「外を翻じて内に蓄ふ」とは、外に翻じたるものは雜毒の相である、夫れを内に蓄ふのではない。「内を翻じて外に播く」とは、内に翻じたるも、亦雜毒の心である。夫を外に播くべきではない。明らかに知る、元祖の意は、廢捨すべきは虚假不實の心行、之を蓄へ、之を播くべきは如來廻向の眞實信心の外はないのである。之を思ふに、我等に對して自ら機實の外賢内愚を知らしむるは、高祖の内賢外愚の法身の光明である。而して信は是れ一なれども、其の徳の顯るゝは、分に應じて天淵なるべきである。

大權聖者の法身の光明の顯赫たると、我等貪瞋二河の上に穢かに水火の難を畏れ居る底の者と、同一光景であるべき苦はない。然るに唯だ如來廻向の廣大難思の慶心のみ法身の光明に一如なるを、佛願難思の至徳と爲すべきである。(撰號を親ふこと是の如し。其の他は六要を見て更に味ふべきである)。

第三章 總序文意

一文 一段

六要に曰く「第二に正しく文を解す。經論釋義の常例に准依して、文を分つて三と爲す。一に序、即ち序分、二に標列（劍曰く。御所覽の本に初めに標列あり）より下、第六の末に論語の文を引くに至るまで、是れ正宗分、三に竊以より下、終り卷を盡すに至るまで流通分也。第一、序分の中に於て、文を分つて五と爲す。一に文の初めより下、慧日と言ふに至るまで、略して彌陀廣大の利益を標す。二に然則より下、闡提と言ふに至るまで、先づ觀經に依つて教興の由を明し、粗濟凡救苦の大悲を述ぶ。三に故知より下、崇斯信に至るまで、重ねて名號希奇の勝徳を擧げて、特に下機易往の巨益を勸む。四に噫弘誓より、莫遲應に至るまでは、其の聞法宿習の縁を顯して、人をして隨喜せしめ、其の未來流轉の報を悲んで、堅く疑慮を誡む。五に愚劣より下は、三國傳來の師訓を受くることを悦んで、聞持する所の實有ることを演ぶらくのみ」と。

文段は六要に據るを可と爲す。特に序分の中に、「略して標す」と曰ひ、「先づ明す」と曰ひ、「重ねて擧げ、特に勸む」と曰ふもの、文勢の自然に興るを見るべきである。又「人をして隨喜せしめ、堅く誡め」「三國傳來の師訓を受くるを悦ぶ」と曰ふもの、祖意を顯すこと親切丁寧である。後學の義解に、此の法乳の津々たるもの稀である。義解教導と圓解證入と、自ら天淵なるを見る。

謙敬院は、題號解釋門と入文正釋門に分ち、正釋門を序、正、流通の三分に分つ。全く六要を踏襲す。「正宗分を分つて六段と爲す。一に教を明す」等、是れ亦自然のまゝである。而して序分を分つて五段と爲すも同じ。序分の五段とは、「一に大經に依つて、惣じて彌陀不共の利生を嘆じ、二に觀經に依つて、別して淨土別途の興起を述し、三に前意を結び、法の勝用を顯して、普く機を勸め、四に法の難値を結勸して、深く疑を誡め、五に師承を嘆じ、製作を叙す」と爲す。全く六要を潤色するものである。第二段を分つて二と爲し、一に淨土の興起を顯し（然則）、二に諸聖の方便を示す（斯乃）と爲し、第三を分つて三と爲し、一に正しく徳用を示し（故知）、二に比況して勝を顯し（師者）、三に機を擧げて勸修す（捨機）、と爲し、第四を分つて三と爲し、一に傷嘆を明す（噫弘）、二に値遇を申ぶ（適獲）、三に疑の失を示す（若也）、と爲し、第五を分つて二と爲し、一に先づ師承を嘆じ、聞持を申ぶ（愛愚）、二に緣由を明し、製作を叙す（特知）、と爲す。是れ亦六要を潤色するに外ならず。我等が本典を拜するには、先づ六要に據るべきである。末學の鈔註、皆努力するところ無きに非ざれども、六要の温乎として玉の如く、含蓄するところ深くして、義解の分齊を超えたるに及ばざる歟、（下皆之に倣へ）。

（何となれば、學者は自己の概念を整理して、其の中に聖教の文義を盛らんとするに急なるが爲に、技巧を弄するを免れぬものである。六要主は、文を追ふて義を見ることが嚴正にして、而も猶ほ深義の親ひ難きを懼れて、ひたすら祖意の一端を仰ぎ見るの態度である。無盡法門に必に依つて開かるべきである。科文を爲すの容易ならざるを知らねばならぬ。）

二 文 意

六要に據るに、總序の文段を分つて五段と爲すは、要津を得るに難からざれども、其の文義を釋すること從容なるが故に、深義は容易に窺ひ難し。之が爲に後學各々努力して、發揮せんと爲るものである。就中、文を釋することは、略讀最も親切丁寧である。(但し初めの三段を三經に配するもの、技巧に過ぎたるか。更に考ふべし)

今六要に據つて之を窺ふに、六要に「一に彌陀廣大の利益を標す」と曰ふ中、「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船」とは、語を龍樹に取り、「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」とは、語を天親に取る。而して「弘誓」は因、「光明」は果である。是れ彌陀成佛の因果にして、大無量壽經の意である。「無明」は迷界の因、「難度海」は迷界の果である。光明能く苦因を斷じ、願船能く苦果を滅するが、彌陀不共の利生である。經に説いて「眞實之利」と言ひ、「一念大利無上功德」と言ふもの、此れに外ならぬ。存覺法語(初下)は此の二句を玩味して、妙趣津々として盡きざるものがある。我等が此の文意を得るには、亦龍樹讀と天親讀、曇鸞讀を拜誦して、愛樂三昧に入らねばならぬ。

思ふに、此の一段は本願一乘の因果を光顯するものにして、即ち大無量壽經の意である。「二に觀經に依つて、教興の由を明す」中、「然れば則ち」と言ふは、上を承けて下を起すの語である。之を思ふに、難思の弘誓は唯だ難度海を度せんが爲に起り、無礙の光明は亦無明の闇を破せんが爲に就る。是の故に、此の法は、斯の機を攝せざれば、法も法とするに足らず。淨土教興起の因縁は、願海を以て淵源と爲す。之を果分不可説の法門と稱す(存覺法語に據

る)。諸の生死勤苦の本を抜かんの誓約は、成就して願心莊嚴の妙土と爲り、三種莊嚴は、發揚して十方三世の諸佛の佛事を莊嚴せしむ。華光出佛の莊嚴功德相が夫れである。

觀經の會座は淨土教興起の因縁を爲すものにして、斯の因縁に關かるもの、皆是れ安養界示現の大聖である。淨邦の緣熟し、淨業の機彰るゝに乗じて、調達、闍世をして逆害を興ぜしめ、釋迦、韋提をして安養を選ばしむる、皆是れ果分不可説の法門を彰さんが爲に、大權聖者の善巧攝化を爲したまふものである、といふ意を述ぶるものである。此れは是れ高祖眼に映する願心莊嚴の法門である。願心莊嚴の法門は、苦惱の群萌を救濟し、逆誘闍提を惠まんとするに外ならぬ。終南は之を釋して、「諸佛の大悲は苦者に於てす、心偏へに常没の衆生を愍念したまふ。是を以て勤めて淨土に歸せしめたまふ。亦溺水の人の急に須く偏へに救ふべきが如し。岸上の者、何ぞ濟ふことを用ひん。」(十一)とのたまふ。大經に説いて「群萌を拯ひ惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり」と言へるものは是れである。凡そ本願一乘海を按ずるに、其の機は是れ逆惡の劣機、其の法は是れ本願の一法、機一なるが故に法一、法一なるが故に機一である。機一、法一、之を本願一乘と言ふ。即ち「佛願の生起本末を聞きて疑心有ること無き」、之を「大悲の願船に乗す」るものと言ふ。思ふて此に到れば、上に彌陀不共の利生を明すは、本願一乘の因果にして、是れ法、今の淨土の興起を明すは、此の法の斯の機を成就することを彰すものにして、是れ機である。第一段と第二段に、因果門と機法門とあることを知るべきである。

「三に重ねて名號の勝徳を擧ぐ」る中「故に知んぬ」とは、上に在つて因果門、機法門の法義を辨じたるを承けたるものなることを知つて、此の文を見れば、佛願の本(思)未(思)是れ南無阿彌陀佛なるが故に、之を「圓融至徳の嘉

號」と言ふ。即ち彌陀不共の利生を受くるものである。「淨業の機」の機とは、六要に釋して「念佛」の機と曰ふ。念佛とは、即ち今の「難信金剛の信樂」である。苦惱の群萌の救濟せらるゝも、逆訪闡提の惠まるゝも、斯の難信の法の外に、更に一法だも有ること無しとのたまふは、高祖の常の法門である。上を承けて「故に知んぬ」とのたまふは、是れが爲である。而して「圓融至徳の嘉號」とは、下に之を承けて「専ら斯の行に奉へ」と言ひ、「難信金剛の信樂」は亦「唯だ斯の信を崇めよ」と言ふに照應して、一家所談の行信なることを知る。

「圓融至徳の嘉號」とは、行卷(初)に言ふところの「眞如一實の功德寶海」にして、應に選擇の大寶海に歸して、念佛成佛すべし(行卷三十八)とのたまふものである。「惡を轉じて徳を成す」とは、「海と言ふは、久遠より已來、凡聖所修の雜修、雜善の川水を轉じ、逆訪闡提、恒沙無明の海水を轉じて、本願大悲智慧眞實、恒沙萬徳の大寶海水と成す、之を海の如しと喩ふる也。」(行卷四十六)とのたまふものである。行卷は斯の一句より開けたることを知らねばならぬ。

「難信金剛の信樂」とは、信卷に言ふところの「信樂と言ふは、則ち是れ如來の満足大悲、圓融無礙の信心海なり。」(信卷二十二)と言ふものは是れである。「疑を除き證を獲しむる眞理也」とは、「斯の心は、即ち如來の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る。」(信卷二十二)の義である。信卷は此れより開け來るものである。

「爾れば、凡小修し易き眞教(行卷である)。「本願一乘絶對不二の教」(行卷四十八)と言ふ、愚鈍往き易き捷徑なり(信卷である)。「世間難信の捷徑」(信卷本初)と言ふ。大聖一代の教、是の徳海(「功德寶海」即ち南無阿彌陀佛)に如くは無し。」とは、下に至つて明すところの大意である。

「穢を捨て淨を忻ひ」とは、信卷本(初)に「忻淨厭穢の妙術」と言ふ。

「行に迷ひ信に惑ひ、心昏く識寡く、惡重く障多きもの」とは、是れ機の實相である。

「特に如來の發遣を仰ぎ(教卷)、必ず最勝の直道(行卷)に歸して(末代の教門を示す)専ら斯の行に奉へ唯だ斯の信を崇めよ。」とのたまふもの、上來を承けて、之を行信に歸し、一宗の玄規を提示して、慇懃に教誨したまふものである。

此れに由つて之を見るに、序の文と下の正宗分と照應して、此の一段は、一部の大意を卷いて行信と爲すものなることを知る。先輩の之を小經の意と見たるは、上を大觀二經と見る勢に乘じ、之に准じて小經と見たるもの歟。少しく文に迂なるものなきか、深くは考ふべきである。

已上一部の玄規自ら彰る。之を要するに、本願圓頓一乘を光顯するに、因果と機法と行信とを以てするものである。「四に開法の縁を顯して、人をして隨喜せしめ、及び疑慮を誠む」る中、「噫、弘誓の強縁は多生にも値ひ難く、眞實の淨信は億劫にも獲難し。」とは、「無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し。」(信卷本初)と嘆じたまふが高祖の眞風である。茲に至つて、因果、機法、行信、は之を弘誓の強縁と爲し、弘誓の強縁は眞實信心を獲得せしむるに在るの意が彰るゝのである。故に之を承けて、「過行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。」と勸め、又之を誠めて、「若し也此の廻疑網に覆蔽せられなば、更つて復曠劫を運歴せん。乃至聞思して遲慮すること莫れ。」とのたまふもの、唯信正因の宗風を振ひたまふの文勢を見るべきである。

「五に師訓を受くることを悦んで、開持を述ぶ」る中、「眞宗の教行證を敬信して」とのたまふ「教行證」は、所

依、所修、所得の法にして、「信」は能依、能修、能得の法である。之を三法門とし、四法門とするも、但だ唯信正因の法門と爲すべきである。

何となれば、三法門は是れ法體成就門にして、四法門は是れ機受趣入門である。三法圓具の妙行、一南無阿彌陀佛を以て法と爲し、之を「眞宗の教行證」と言ふ。之を信するの外に、眞宗眞教なるもの有ること無し。即ち「願成就一實圓滿の眞教眞宗」(信巻末四)とは是れである。是れ亦願心莊嚴の法門である。

高祖は斯の大法門を高顯せんが爲に、一王願を開いて五願と爲し、五願を擧つて四法佛土を建立したまふ。一王願の體は三心なるが故に、三心を開いて四法佛土を建立するものである。之を大信海の法門と爲す。

三法門を以て行中攝信の法門、元祖の稱名本願の教意と見るものは、未だ此の三法圓具の妙行を見ざるの徒である。一たび此の法門眼を開けば、上に述べるところの因果、機法、行信の三門、皆一大信海に入つて、唯信正因の宗

風を振ふに足る。是れ法雷轟の大觀である。恐らくは祖意を得たるもの歟。

上來辨するところは、凡ての聖教は序題に還して其の大綱を攪るべしといふ故實に倣つて、些か總序の文意を述べたるまでである。後賢更に之を是正したまへ。

因に無明論と章提別選、章提權實の宿善分齊との問題を検討すべきである。

評 林

一 樹 心 錄 卷一の二

樹心錄に科して三段と爲し、「初めに三經の大綱を示す」と云ふもの、文に親しからず。特に「爾れば、凡小修し易き眞教乃是の徳海に如くは無し」の文を「總結」と爲し、次の「穢を捨て淨を忻ひ乃遲慮すること莫れ」の文を「二に勸誡」と爲すは、六要の科を捨てたるものにして、甚だ不自然である。「爾れば」の二字は「唯だ斯の信を崇めよ」の結語に照應するものにして、「徳海」の字に至つて盡くるものではない。「徳海」迄を總結と爲すには、「爾れば」と承くるも拙なく、亦何となく力足らず。「爰に愚禿禿の親覽」已下の文を「三に述作の由」と爲すは尋常である。之を要するに、六要の科文の自然にして渾然たるに比すれば、到底及ぶべくも無い。(樹心錄一たび此の誤を爲して、略讀、述聞、敬信記皆之に隨ふ。徴決と對問記は六要の意を得たるに近し。聖教を捨てて末疏に隨ふの弊風を見る。)

此の師始めて「圓融至徳の嘉號」と「難信金剛の信樂」を行信と見たるは一隻眼である。然るに、折角之を見ながら、前後に連繫無く、法門自然の展開を知らざるは、當時尙ほ宗學の初期なりし爲か。而も當時に在つて、已に文を解するに諸經論に據りたるは、宗學勃興の爲にして、亦是れ師が博覽の功である。諸經論を引いて、調達、問世、章提の本地を彰すところ親切なるを見て、之を思ふ。

二 略 讚 卷一の六

文を解すること、略讚に至つて最も親切である。其の研鑽の功や、之を稱すべきである。然るに六要を捨て、樹心録に随ふは、我等の與し難きところである。

先づ第一段「竊かに以みれば乃至是の徳海に如くは無し」を以て、「具さに三經の意を彰す」と科し、「一に大經の意に依つて法の眞實を嘆す。二に觀經の意に依つて機法を顯す。三に小經の意に依つて機法の益を嘆す。中に於て、初の二句は大行の徳を嘆じ、後の二句は大信の徳を嘆す。」と爲す。而して「爾れば乃至是の徳海に如くは無し」の文を以て、「四に三經の教益を結嘆す」と爲す。全く樹心録に依るものである。思ふに、學鞭一たび開けて、後學皆之に隨ふ、唯だ師教に順ならんとするの風である。美を盡すも、未だ善を盡すものに非ずと言ふべきである。祖典に何の不足有つてか、之を捨つるや。深く思はざるべからず。

思ふに、六要の科文最も祖意を得たるか。「難信金剛の信樂は、疑を除き證を獲しむる眞理也」と言ふに至つて、眞宗の玄規を盡す、以て一段とすべきである。而して「爾れば乃至斯の信を崇めよ」の文は、一連なる勢である。強ひて之を切つて二段とするは、無意味なるのみならず、眞宗の玄規を承けて、行信に歸せしむるの勢を失ふものである。「眞理也」の「也」の字重し。「徳海」のところに「也」の字を置かざるは、「爾れば」を以て「斯の信を崇めよ」に照應せしむるものである。樹心録が此の文勢を見誤りたるは、第一段を以て三經の大綱と見たるが、其の病源である。眞實の教とは「大無量壽經是れ也」(教を三と判するが、眞假明斷の本書の風格なることを知るもの、文のまゝに

義を得ること六要の如くなるを可とすべきである。強ひて勢に乗じて三經と爲すの必要は無い。

初の二句を解するに、生佛の因果を辨するは、此の師の發揮であるが、巧である。以て参考とすべし。

三 徵 決 卷一の三十一

文を分つて三段と爲す。「一に法徳を叙す、二に勸誠を示す、三に造意を述ぶ。初の中に三。一に大經の意に依つて因果を嘆じ、二に觀經の意に依つて教興を顯し。三に小經の意に依つて行信を示す。初の中に。一に弘誓の滅苦を嘆じ、二に光明の被闇を嘆す。」と科す。

「因果」と云ひ、「行信」と云ふものよし。「爾れば」已下を、下に屬して「勸誠を示す」と爲すもの、樹心録及び略讚よりも文に親しく、六要に近づき來れるものである。凡そ聖教を拜して、雄渾自然の文義と、法爾自然の法門とを仰ぐものは、聖教の文義を曲げて、自己の見解の概念の範疇に容れてはならぬことをのみ念とすべきである。大權の筆致の逍遙として有無を離れたるところに、法理條然、森嚴にして犯すべからざるもの有るを仰ぐ者は、法身を見るものである。大なる哉、六要。

次に「夫れ題は一部の總標、序亦一部の總序なり。是の故に題序義意實に吻合す。」と云ひて、行信を以て總序の文を概論するは、頗る我が意を得たるものである。然るに此の師の行信は、是れ能行説なるが故に、所依、所修、所得の教行證の三法は、之を行中攝信の法とのみ見て、「圓融至徳の嘉號」の文を見ながら、之を但た所稱の名號とのみ心得たるものである。惜むべきは大心海の行信を知らざるの失である。

是を毫厘に誤つて是を千里に失するものと云ふべく、宗學の容易ならざるを思はねばならぬ。唯だ此の師の辯述最も努めたるところは、能行家の意許を見るに便である。精讀して之を知るべし。

次に六要に據つて、「義に二重有り。一に闍王、章提は是れ所令、調達、釋迦は是れ能令なり。二に調達、釋迦は是れ所令、彌陀は是れ能令なり。」と云ふは、一家の常談なれども、文義簡潔である。初學の士は著眼せねばならぬ。特に、「調、闍の得道も、其の實を對論すれば、亦彌陀本願の利益に依る。」と云ふは、本願一乘海を見たるの識見にして、好し。

次に「是れ上來の所明を以て、行信に結歸す、故に「故に知んぬ」と言ふ」と云ふは可し。然るに行信は、必ずしも小經の意に非ず、寧ろ大無量壽經の宗致であらねばならぬことに注意せざるは惜むべし。是れ、因果、機法行信の三門互に相攝相對して、大心海の法雲彌覆せるを淨土眞宗と爲す、といふ大觀を得ざるが爲である。

次に「圓融至徳は上の難思に應じ、嘉號は上の弘誓に應ず。」と云ふはよし。乃至「圓融」を釋すること親切である。初學の士は就いて見るべし。特に、「是れ、彌陀如來は罪徳不二（罪障即菩提）、感智同體（煩惱即菩提）に建し、此の融徳有つて、衆生を救濟するに由る。」と云ふもの佳である。

次に「雲の鈔、正智の二字を以て斷じて下の大信に屬し、下の眞理を以て信の所證と爲すは誤也。」と云ふはよし。

四 述

聞 一の五

「正文三。一に法義を嘆す、二に捨穢の下は他人を勸む、三に爰愚の下は自喜を述ぶ。」と爲すは、六要の科文に及

ばず。文字も亦香氣無し。今煩しく辯ずる要無し。石泉の才氣を以てして、而も猶ほ是の如くなるを思ふて、自ら恐懼する者は幸である。

「竊かに以みるに 乃至逆誘闍提を惠まんと欲してなり」の文を以て、大經、觀經の機法の眞實と爲すもの、從來の釋の如し。

又、章提權實の論あり、見るべし。

五 對

問 記

一の二十

本典科文を分つに「一に由序、二に正説、三に結意。」と爲す。六要到序、正、流通の三分科を用ふるは、祖典を仰いで如來の金言に齊うするもの、崇重の至りである。對問記何ぞ之に據らざるや、其の意を得難し。

「初の中に三。一に法義を叙す」とは、「竊かに以みるに」より「眞理也」に至つて、之を一段と爲すものにして、六要到序は佳である。「二に勸誠を示す」とは、「爾れば」より「運慮すること莫れ」に至り、「三に造意を述ぶ」とは、「爰に愚禿」より「獲る所を嘆するなり矣」に至る。此等の科文は、樹心、略讚、迷問を捨て、大體六要到序のものにして、穩當である。

「一に法義を叙す」中、「一に正しく他力の法本を明し、二に正爲は極惡に在ることを示し、三に行信の利益を結嘆す。」と云ふも、亦文に親し。

「法義を叙する中、文に三節有り。今は初に大經の意に依つて、正しく他力の法本を明す。此の中、弘誓と光明

は、是れ本佛因果の二徳、難度海と無明闇は、是れ衆生生死の因果なり。態度、能破即ち佛徳の、能く衆生往生の因果を成ずる者也。是の如く本佛の因果能く衆生の因果を成ずるを、他力の法本と爲す。此の法一たび立つて、普く衆機を益するに、機品千差なれども、極悪を正と爲す。故に次に、正爲は極悪に在ることを明す。是れ法を以て機に投するの相也。既に法を以て機に投するに、能破の法は即ち是れ大行、機能く之を領するは即ち是れ大信にして、此の大信も亦自發に非ず、行信並に是れ願力廻施なり。故に後に行信の利益を結嘆す。」と云ふ。(劍云く。下には「小經の意に依つて行信の利益を結嘆す」と云ふ)。文に就いて要領を得たるものである。然るに此の師の行信を論ずるや、就行立信の觀經疏の説に憑つて、未だ直に願心莊嚴の法門を大觀するに至らざるは惜むべきである。余が評して、之を始に得て、之を終に失ふと云ふは、此れが爲である。

又、無明を論じて、通別二義を立つ。從來の學說なれども、辨ずるところ親切である。一讀すべし。但し今家の聖教に依るに、無明は漸々破にして、疑或は一念破である、未だ祖典の中に、無明を以て疑惑と爲したまふところは無い。此の説は末學の分別のみ。法雷轍には別に義がある、他日之を精論すべし。(淨影の大乗義章五本「無明と言ふは、癡闇の心體、慧明無きが故に無明と曰ふ」の釋は、今家にも用ひ得る釋である)

「圓融」を釋して、「佛願の不思議力の爲に、唯だ彼の名號を聞信して、佛願力に全託すれば、則ち知らず識らず圓融の理に契ふて、轉惡成徳の益を得。讚に曰く。無礙光の利益より、威徳廣大の信をえて、かならず煩惱のこぼりとけ、すなはち菩提のみつとなる。豈圓融の至徳に非ずや。」と云ふもの好し。

此れに由つて之を思ふに、前の無明論も亦、光明の廣海に衆生一切の無明海を翻轉せしむるの圓融の至徳であらね

ばならぬ。無明煩惱我等が身に満ち／＼て、臨終の一念に至るまで消えず、失せず、絶へざるまゝに、往生の大果を得るは、是れ不斷にして斷なるもの、偏へに無礙光の照益である。之を別願難思の風光と仰げば足る。此れが末學有碍の見解を超えた世界である。「至徳の風靜かにして、衆禍の波轉す」とのたまふは斯の風光である。我等は唯だ凡夫有礙の見解を捨て、祖典のまゝに玩味すべきである。法體斷の故に機不斷である、機不斷の故に法體斷である。斷の不斷、不斷の斷、之を無所得中道の正觀と爲す。安心を論ずるときと、法徳を語るときと、自ら其の調を異にして、而も法徳は機を隔てず、機は法徳に違はざるが本願一乘である。之を義解教導の分を超えて、圓證入の境に入ると云ふもよし。何を苦むで、聖教の所判に無き有礙の分別を弄するや。

「正智とは、下には眞理と云ふ。大行を智と云ひ、大信を理と云ふ。理智反轉して、還つて不二を彰す。至徳の名號能く信智を成じ、信智の全體即ち妙理なるが故なり。今正智と云ふは、圓融無礙は但理に非ず、然るに窮理の正智、理の如く現前すれば、理能く智を成じ、惡を轉じて徳を成じ、事々圓融す、故に正智と云ふ。」と云ふは佳である。(劍云く。大行を理と言はゞ聖道に濫す。大信を理を言ふは、眞如一實の功德實海を全うするの意歟。強ひて反轉するに非ず。今家の常談ならんのみ。何となれば、名號の智は當然である、功德なるが故に。信心の理は、眞如一實の信海、是れ佛性である、之を一乘海の義と爲すのみ。)

此の師に斯の圓解有り。然るに何ぞ之を前の無明論に及さざるや。恐らくは正信偈の文を快會せざるの失ならん。而して其の病源は、無明の漸々破と疑或の一念破とを徹視せず、文義を混線せしめ、聖教の指南無き末學有礙の分別を弄するより來る。從來の概念化したる傳統を捨て切らざるところに此の誤を犯すか。今の宗學者は之に雷同する者

のみ。

（因に正信偈の文を解せば、「攝取心光常照護」と言ふは、前に一乗の因果を講ずるが故に、之を承けて現生の利益を明すものである。現生の利益は攝取心光常照護の一句に盡きる。此の妙趣を開いて、「已能離破無明闇」等と言ふ。破無明は無礙光の力である。之を開いて三光と爲すは、態く三毒を對治するが爲である。之を圓融の妙益と云ふ。「無始已來輪轉六道の妄業、一念南無阿彌陀佛と歸命する佛智無生の名願力にほろぼされて、涅槃畢竟の眞因はじめてきざすところ」（實錄本二十二）と云ふも是れである。又是の貪瞋の雲霧の光海莊嚴を隠すことある我等凡夫も、淨土正依莊嚴の籠々として我が前にあるを疑はず。是の故に、「雲霧之下明無闇」とは、無明無きの謂である。是れは領解の心中を指してのことである。「信心天」は法、「雲霧之下」は機、機法相應のところ、其の體無礙道である。信心の白道である。然るに二河白道は、「衆生貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生心を生ず」るを喻ふ。今の「眞實信心天」は、「此の心廣大にして法界莊嚴に入ることを講ずるのである。是れ心光常照護の徳を嘆ずる爲である。信心を天と言ふは此れが爲である。」

六 敬 信 記 卷一の二三

「今は川分で辨するが故に、猶六要鈔に同じて、序正流通の三とす。」と云うて、特に聖教の重んずべきを説くところ佳である。

文を科して「一に深く法義を嘆す（初より徳海まで）、二に有縁を勸誡す（捨穢より還慮まで）、三に自喜を序述す

（妄愚忝已下）」と云ふ。（此の點は六要に隨はず）

「初の中に二。一に直辨、二に比顯。初め直辨の中又三。一に略して法義を標す。（初より慧日迄なり。）二に聖化に寄顯す。（然則より闡提迄なり。）三に行信を結成す。此の三段、序の如く自ら大觀小三經の法義に當る。」と云ふ。別に發揮するところ無し。

三經と見るの意を問答するも、不得要領である。又已に之を行信と言ふ。行信必ずしも小經である筈は無い。此の師は宗乘を大成せるものと信ぜらるゝ人なるに、猶ほ未だ因果、機法、行信の一聯關を爲すところに、眞宗の玄規彰れて、本願一乘海を莊嚴するを大觀するに到らず。宗學の遅々たる、何ぞ此に在るや、噫。此の師の見るところは、此の師の心境にして、我等が見るところは我等の心境であるが、光海は無限なるが故に、此れより更に一大展開を爲し得るものであらねばならぬ。

善護師は空華三師の説を合糅して、終生之を辯述せる人にして、別に發揮するところ少しと雖も、縷々として辨じて倦まざるところに、其の溫良恭謙の風を見る。努めたりと謂ふべし。

已上は、樹心錄、略讚、徵決、述聞、對問記、敬信記を讀みて、漫りに妄評を加へたるものである。先輩が一生の心血を盡きたるものに對して、餘りにも禮を失するものであるが、唯だ聖教の指南に準じて、漸々に光海莊嚴の大法門に入らんが爲の微志に外ならぬ。余が評論も、或は少分の當を得たるもの無きにも非ざるかと思ふ。されど先輩の我等に遺したる研鑽の功は、之を没してはならぬ。但だ光海は無限である、莊嚴は自然である。此の境地には紛々の學解も無く、擾々の論議も無し、大なる哉、光海莊嚴。

宗學三百年間の努力は、之を要するに、初は眞宗學なるものを建設せんとするところに、識見の高きものがあつた。日溪法霖が其の代表者である。中頃は宗内の異解に對して、森嚴の批評を下したものがあつた。仍國大瀛が其の代表者である。其の前後に於て、宗學の中樞問題たる行信論の研究盛にして、之を完成したるものが光明坊斷鑑である。

然るに、いつしか統一的大觀に遠去かり、思索の爲めの思索に陥らんとするに到つて、其の生氣を失ひしものである。今や之を最初の意氣に還すのみでなく、凡てを生きた大乘の眞生命の中に投じて、萬人をして齊しく光海莊嚴を仰がしめねばならぬ。

第二篇

第一章 標列

- 「顯眞實教 一
- 顯眞實行 二
- 顯眞實信 三
- 顯眞實證 四
- 顯眞佛土 五
- 顯化身土 六

六要に標列に就いての釋がある。「教行證の三は常途の教相なり。」又「行の中に信を攝するなり」と曰ふを卒爾に見て、三法門は稱名本願の教語に憑る行々相對の法門である、とのみ考ふるが從來の僻解である。觀經法門の立題を以て本典の外題と爲すは、高祖の意に非ざる筈である。

聖道常途の教相に對するに、稱名一行を以てするは、終吉の法門である。之を觀經法門と言ふ。觀經は釋尊末化の巧說にして、之を從來垂末門と言ふ。而して従本垂末は必ず攝末歸本せしむるものである。且く垂末の末に就いて、

之を従來の本に還すが、終吉の行々相對の深致である。高祖は、願心莊嚴の法門を光顯するが故に、直に従本の本に據して、攝末歸本の法門自然の展開を爲したまふ。六要は、之を體して釋を施すものである。常途の三法は依心起行の法にして、眞宗の三法は願心莊嚴の法である。願心莊嚴の三法は三法圓具の妙行、即ち南無阿彌陀佛なることを光顯するが、本願一乘絕對不二の法たることを知らしめんとするものである。

是の故に、「行の中に信を攝するなり」と曰ふ義を次に述べて、「玄義に云く。南無と言ふは、即ち是れ歸命なり。亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは、即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に、必ず往生することを得。已上」といふ六字釋、義を引用す。此れは是れ行卷の眞髓を得たるものにして、願心莊嚴の法門を奉ずるものである。

行卷(二十五)に、六字釋の法體釋を爲し、特に歸命を釋するの字訓は、本願の三信に據つて之を施し、而も「即是其行と言ふは、即ち選擇本願是れ也。」と言ふ。是れ南無阿彌陀佛が我等の往生の行體なることを顯すものである。此の行は是れ信なるが故に、歸命を釋するに本願の三心を以てしたまふ。之を指して行中攝信と曰ふが六要である。行中攝信の語、必ずしも行々相對の法門に非ざることを知らねばならぬ。此れが従本垂末の本に就き、攝末歸本の本に據したる願海自爾の法門である。此の高處に立つて、また攝末歸本の法門自然の展開を見たまふが、高祖の稱名破滿の轉釋(行卷五)である。

「選擇の大寶海に歸して、念佛成佛すべし」(行卷三十八)と言ふも、亦此の意である。

六要主は斯の意を得て、「行は所行の法、信は是れ能信なり。」と曰ふ。

所行とは、能行に對す、稱へられての名號である。「大行とは、則ち無礙光如來の名を稱するなり。」(行卷初)とは、

是れである。此れは是れ垂末の末に就いたものであるが、但だ末に凝滯してはならぬ(行卷を就行立信の法とのみ見るは誤である。)従本の家垂末なるが故に(垂末の家の従本ではない。)末は必ず本に歸せしむるものである。「眞如一實の功德寶海なり。故に大行と名く。」(行卷初)と釋したまふは其れである(南無阿彌陀佛となれば、能所を超えてゐる。)

次に、能信に對する所信は南無阿彌陀佛である。稱名ではない。何となれば、一たび願心莊嚴の法門を見るものは、未化の巧説を超えて、直に願海に歸るからである。發遣の正意は、本願成就一實圓滿の眞教眞宗に外ならぬ。招喚の體は、是れ南無阿彌陀佛である。即ち是れ、歸命とは本願招喚の勅命にして、阿彌陀佛は我等が爲の往生の行體なるが故である。之を「選擇の大寶海に歸す」と言ひ、之を「圓融至徳の嘉號」を全領したる「難信金剛の信業」と言ふ。此れ願心莊嚴の法門である。

六要の釋に「所行」と曰ふは能行に對す、此れ攝末の始にして、「能信」と曰ふは所信に對す、此れ歸本の終である。而して願心莊嚴の法門には、常に法體を明らかにせねばならぬ。終南の就行立信にも、此の始終があるが、此れは攝末歸本法論である。高祖の行卷は、願心莊嚴の大經法門なるが故に、従本の本に據して垂末の末を統攝し、歸本の本に據して攝末の法論を攬るものである。先輩の中に、行卷を以て終南の就行立信の法門と混同する者有るは、之を始に得て、之を終に失するものにして、願心莊嚴の風光を見ざるものである。

教行信證大意(四七)に據るに、「眞實の行といふは、さきの教にあかすところの淨土の行なり。これすなはち南無阿彌陀佛なり。」と曰ふ。而して次に「これは行すれば西方の往生をえ」と曰ふは、能所行對の行門の法門である。此れ

従本垂末の末に就くものにして、觀經法門である。此の處に在つて法門を立つるは終南、吉水である。「これを信すれば無上の極證をうるものなり。」とは、攝末歸本の本に就くものにして、大經法門である。此の處に在つて法門を立つるは、高祖の願心莊嚴の法門である。教行信證は願心莊嚴の法門なるが故に、「これを信すれば無上の極證をうるものなり。」と曰ふ。次に「眞實の教といふは乃至大無量壽經これなり。乃至これすなはち彌陀の四十八願をときて、そのなかに、第十八の願をもて衆生生因の願とし、如來甚深の智慧海をあかして、唯佛獨明了の佛智をときのべたまへるがゆへなり。」(三十九)と曰ふに對照して、願心莊嚴の法門は唯信正因を以て眼目とする義、愈よ明了である。又次に「第三に眞實の信といふは、かみにあぐるところの南無阿彌陀佛の妙行(行卷)を、眞實報土の眞因なり、と信する眞實の心なり(信卷)。第十八の至心信樂の願のこゝろなり。」(四十二)と曰ふもの、行卷、信卷、皆願海を開闡せるものにして、唯信正因の外なきこと愈よ明了である。六要に「信行離れず、機法是れ一なり。」と曰ふは、此の義を顯すものである。

次に六要に「眞化有り」と雖も、總て證の中に攝す。」とは、眞實の證果の中に化身土有り、と言ふに非ず。眞實の證は眞實智慧無爲法身である、則ち難思議往生の得果である。此の證果は、此土入聖の法門に非ず、難思議往生の得果である。故に衆生歸入の處は光壽莊嚴海なることを顯さんが爲に、十二、十三の願を攬つて眞佛土を建立したまふ。「彌陀如來は、如より來生して、報應化種々の身を示現したまふ也。」(四卷初)と言ふ。一如は、能證より云へば、衆生の證果にして、所證より云へば、本佛は、此の眞證より、報應化種々の身を示現したまふ。此の報に眞報と假報と有り、眞報は光壽莊嚴、即ち正覺の果海にして、假報は是れ此の正覺の化用である。我等の證

果は、直に眞報土に入つて、化用の化土に關からざれども、彌陀の正覺門に據して之を攬るときは、一正覺に實體と化用と有つて、直に實體に冥合すること能はざる者の爲に、且く化土を現じて、此の機に與ふるものである。化土は、但に機の感見のみに非ず、實の爲に施したる權用である。斯の權用無くば、衆生いかでか極樂に往生することを得ん。此れ亦願海である。「證の中に攝す」とは、此の願海に眞假有ることを顯すものである。眞假皆願海の中なるが故に、亦「證の中に攝す」と曰ふのである。證卷の文の由つて來るところに還して、此の義を見るべきである。衆生の證果に化身土を攝すといふ意ではない。證の義を明らかにせんが爲に眞佛土を開き、眞佛土を明らかにせんが爲に化身土を開くものなるが故に、化身土は眞佛土を明らかにする爲であり、眞佛土は證卷を明らかにせんが爲である。此の意義が證卷の中に在つて含蓄せらるゝといふ意である。此れは機受趣入門の説ではなく、願心莊嚴の法體成就門の義である。六要の解釋、含蓄するところ重々にして、而も從容自然なれば、唯だ法門自爾の展開を仰いで、其の釋義の甚妙なることを玩味すべきである。

評林

一樹心錄 卷一の七

「此れ總じて一部の別目を列す。教は是れ能詮、行等は是れ所詮なり。教に依つて行を起し、行に就いて信を立て、信行具足して眞證を得、眞佛土を見る。眞實既に顯るれば、當に方便を辨すべきが故に、後に化身土を分別す。

眞假の差別有りと雖も、皆濟凡の大悲に非ざるは莫し。斯れ乃ち六軸の次序也。」と云ふ。是れ六要の深義を會せざる末學の分別である。若し六要に準ずれば、教に因つて行を顯す、と云ふべし。又「行に就いて信を立つ」とは、就行立信の法門を以て、願心莊嚴の本典を扱はんとするものにして、未だ徹底せず。「信行具足して眞實の證を得」と云ふは、後世の行信因縁説を爲したる僻解に近し。教行信證大意の、唯信正因を光闡するに努力せる聖蹟を認めざるものである。此れ願心莊嚴の法門といふことに氣附かざるより起る僻解である。

樹心録の外、諸説紛々、一々之を評論せず。又標列の文を安するに異本有り、略讀(卷二の題)に辨するが如し。

(附) 因に科文を辨す

科文を解するは徵決(卷一の十五)に詳し。此の中、六要を破するは當らず。

自ら「今集めて一科を成す」と云ひて、序文の中に題號を攝し、正文を開いて「列目」「隨顯」と云ふもの、其の調卑し。六要の技巧無きは、自然の法門を語るに適す。又「所化の因果」「能化の身土」と云ふも、教行信證は趣入門の法相を以て本とするの意に暗し。特に「一に總じて往還を標し、二に別して往還を釋す。」と云ふは、教行信證を以て、二相門の法義と見るものにして、大綱、要義を提ぐるに、既に其の大觀を失ふものである。本典は二廻向の卷に非ずして、教行信證である。眞佛土の如きは、難思議往生所入の處を明らかにする爲である。六要(第五の二)に、之を「所歸の身土」と釋したまふは、頗る宗要を顯明するに足る。「所歸」とは所歸入の義である。科文は須らく六要に據るべきである。

第二章 總標教旨

上に標舉して「大無量壽經眞實之教」と言ふ。大無量壽經と標舉して、此れこそ眞實の教にして、此の經に依つて開くものが淨土眞宗である、といふ意を示すものである。此れ依經開宗門である。今「往相の廻向に就いて、眞實の教行信證有り。夫れ眞實の教を顯さば、則ち大無量壽經是れ也。」と言ふは、本願力の廻向を開いて往還二種と爲し、往相廻向に就いて大無量壽經を出すことを明すものにして、選願開宗門である。標舉の文と總標の文と對照して、依經開宗と選願開宗の二門有ることを知るべきである。

「謹んで淨土眞宗を按ずるに乃ち即ち佛の名號を以て經の體と爲る也。」の文を、六要に「總じて教旨を標す」と科するもの、頗る文義に順應せるもの歟。六要は謂はゆる名人の作にして、其のまゝに置くべきものなるに、一語録、樹心録等は、「謹んで乃ち教行信證有り」の三十一文字を科して「先づ眞宗の玄規を顯す」と云ひ、「總じて眞宗の大綱を示す」と云ひ、諸家も亦多く之に隨ふは、恐らく高祖の意許に非ざるべし。何となれば、先づ眞宗の玄規を顯さんとするに、此の三十一文字を以てするものならば、結句としての力が足らぬ。此れは下の「經の體と爲る也」に到つて、一段落を爲すものである。又「一には往相、二には還相なり」と言ひ、茲に「往相廻向に就いて、眞實の教行信證有り」と言ふは、證卷(五)の「二に還相の廻向と言ふは」と言ふものと對照せしむるものである。三十一文字を以て一宗の玄規を盡くす筆致ではない。文勢を見て、六要に隨ふべきである。

總じて教旨を標する中に、「一に略して標す、二に略して大意を叙す、三に經の宗體を明す。」の三段がある。

「誰んで淨土眞宗を按ずるに」とは、宗名を解すること、六要に善盡くし美盡くしてある。「眞宗」の眞の字は、大無量壽經(上卷)の「眞實之利」の眞より來る。論(初)には之を「眞實功德相」と曰ひ、本典には、「眞如一實の功德寶海」(行巻初)と言ひ、「信如一實の信海」(信巻本初)と言ふ。即ち終南の謂はゆる「眞宗」である。

六要に曰く「法華と彌陀と内證同體なり。彼は爲聖の教、此は爲凡の教、所被の機、衆凡殊なりと雖も、所説の法共に是れ一乘。眞宗の稱、彼此密かに通ず。此れは是れ今家不共の別意なり。」と。「内證同體」とは、眞佛土卷の釋に「當卷の大意は、此の光明、壽命の無量を以て、眞報身常住の義を成ずる也。乃至諸佛の壽命、平等の果海、闕減有ること無し、只是れ本覺彌陀の壽也。此の義邊に約すれば、酬因感果は是れ始覺の智、無爲凝然は是れ本覺の理、理智不二にして、始本是れ一なり、已に始覺に至れば、必ず本覺に冥す。又釋迦佛の久遠の實壽即ち阿彌陀の名義也。故に法華に云く、慧光照して無量なり、壽命無數劫なり。已に無量光とは佛智觀照の妙用也、無量壽とは法身常住の妙理也。體用不離にして、理智冥合す。釋尊の功德全く阿彌陀諸佛の功德、又以て道同なり。」(六要第五の二)と曰へる文と對照して、鈔主の圓解を仰ぐべきである。大經に「善く方便を立てて三乘を顯示す」(上四)と言ひ、又「一乘を究竟して彼岸に到る」(下八)と言ふ。彼岸に到るの微妙法は唯だ本願一乘あるのみである。彼の三乘の如きは、是れ唯だ蘭林遊戯地方便權門である。而して華嚴の法界緣起、法華の諸法實相、皆一乘法なれども、此れは是れ諸佛の内證智にして、之を説いて「唯だ佛と佛とのみ乃ち能く窮盡す」(法華經)と言ひ、「二乘の測る所に非ず、唯だ佛のみ獨り明了せり」(大經下四)と言ふ。謂はゆる法界唯だ一法身なるものである。六要に「彼此密かに通ず」と曰ふは與門の釋にして、之を眞佛土卷に來つて、本覺彌陀の壽也」と曰ふは奪門の釋である。もとは是れ高祖の「安樂佛國に到れば、即

ち必ず佛性を顯す」(眞佛土卷二十九)と言へる一乘限より來るものである。

樹心錄(卷一の八)に「眞宗」を釋して、「一に眞僞對、二に眞假對、三に要門弘願對」を聞く。六要に此の分別を設けざるは、本願一乘絶對不二の風光を仰がしむるものである。權實眞假は、機の前にのみ在るが故に、之を眞佛弟子の釋下に於て審かにするが本典である。六要を以て用意周到ならずと見てはならぬ。

六要に「二種の廻向」を釋するに、論註(下三十四)の「要求其本」の釋に據つて、本願力の廻向の義と解するは、祖意を體せるものである。

論註に、一本願力を開いて三願と爲すところに、往還、因果の法門がある。高祖の五願開示は之を審かにしたまふものである。

一論(二)に「佛の本願力を觀するに、遇ふて空しく過ぐる者無し、能く速かに功德の大寶海を満足せしむ。」と曰ふ。此れ一論の宗本にして、此の義を開くものが論(三)である。論主が本願力を觀するとは、「云何が觀するや」「五念門の行を修して成就すれば、畢竟して安樂國土に生じ、彼の阿彌陀佛を見たまつることを得。」と觀するのである。此の觀達解了の外に、生信なるもの無きが故に、「云何が信心を生ずるや。」と言ふに、亦是れ、「五念門の行を修して成就すれば、畢竟して安樂國土に生じ、彼の阿彌陀佛を見たまつることを得。」と信じて疑はぬのである。本願力を信するの外に、一心なるものあることなし。之を「世尊、我れ一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願す。」(論初)と啓告したまふ。「本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひとぞなき、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし」(天觀經)とは、之を證したまふものである。

「能令」の二字は、是れ「諸の衆生をして功德成就せ令む」(大經上三十二)の義である。斯の「令」の字は、一論に之を「本願力の廻向」(淨土論十)と曰ひ、賢師は、之を開いて三願的證し、往還、因果皆願力に由ることを審かにしたまふものである。「遇」の一念に功德の大寶海を満足せしむるは、五念二利の功德は、是れ願力成就の法なるが故である。「願力成就を五念と名く」(二門論三)と言ふは是れである。

一心の中に、能く法藏所修の五念二利の功德を圓具するが故に、速得菩提の正因となるのである。此の圓具の徳、善男善女の修相に顯れて、「身業、口業、意業、智業、方便智業」(論註下三十二)の五念門の行となる。行相を示すと雖も、其の行體たる功德を彰すが一論の施設である。何となれば、一心能く此の功德の大寶海を満足するが故に、能く無上菩提の正因たるの義を彰さんが爲であるからである。

起觀生信の中に、「五念力を示す」と「五念門を出す」とがある。「五念門を出す」已下は、皆願力成就の法を顯すのである。「五念門の行を修して成就すれば」は、願事成就の「是を菩薩摩訶薩、五種の法門に隨順して、所作意に隨ひ自在に成就したまへりと名く」(論九)に至る。註論に釋して、「言ふこゝろは、此の五種の業和合すれば、則ち是れ往生淨土の法門に隨順して、自在の業成就したまへるなり」(論註下三十二)と曰ふものは是れである。又、畢竟得生見佛の得生は近門にして、見佛は宅、屋二門である。論註上卷は不虛作住持を釋するに得生を以てし、下卷は見佛を以てする。而して見佛は是れ蓮華藏界にして、必すや蘭林遊戯地門に出づべきものである。證卷の還相下に一論の文を引く(論卷五)往還の名無しと雖も、其の幽意有るが故である。幽意とは、「廻向を首と爲して大悲心を成就することを得たまへるが故に」(淨土論三)とのたまふ。之を本佛の廻向とするときは、論ずるの餘地なく、和讃に讚述(論卷五)したま

ふ如く願る明了であるが、之を論主の廻向門とするときは、此の土に於て大悲心を成就すること難きが故に、必す教化地の果を待つのである。論註は、此の意を得て、廻向を開いて往還の二種と爲す。註論の當分は約末の廻向である。然るに其の本を尋ねるに、阿彌陀如來の本願力の廻向なるが故に、一論已に之を「本願力の廻向」(淨土論十)とのたまふ。他利利他の深義は之を明らかにし、三願的證は、其の洪範を願海に攪るものである。高祖の往還二種を一本願力の廻向と爲したまふもの、此れが爲である。

出五念門已下は、之を願見すれば、善男善女の修相に寄せて、一心圓具の功德寶海を開顯するものにして、之を嚴求其本の釋より逆見すれば、法體成就門の釋義である。法體成就の釋義は入出二門偈に明らかである。二門偈は本典の他力釋を更に審かにするものである。

教行信證の法門は、元來願心莊嚴の法門にして、願海を光顯するに外ならぬものであるから、今二種の廻向より往還因果の法門を開き來るのである。されど二相門は攝化門にして、四法門は趣入門である。今四法佛土の一本願力成就なることを顯す爲に、之を其の淵源に攪るが此の文意である。

六要に釋して「諸佛菩薩、皆五念を以て菩提を得るが故に」(劍云く。密かに諸佛の本所乘、唯だ念佛三昧に在ることを示す)、彌陀の正覺、即ち五念を修して(劍云く。衆生の往生を成就せんが爲に行ずるところ、五念二利である)速かに成就することを得たまへり」と曰ふもの、實に甚深の妙法門を開闡するものである。(劍云く。六要の意を推すに、彌陀の速得は即ち衆生の速得である。彌陀速得ならずして、何ぞ衆生をして速得せしめん。もと是れ正覺一念を開く因果の相である。正覺の一念は、亦我等の一念喜愛心となる。其の體は唯だ是れ功德大寶海である。機關相應の

妙法は獨り眞宗のみ。末學の諸鈔、到底此れに及ばぬ。大處高處に立つて大觀を失はず、與奪宜しきを得て、時機を啓發するが、六要の妙處なることに著眼すべきである。

「夫れ眞實の教を顯さば、即ち大無量壽經是れ也。」と言ふが、此の一段の主眼點である。「往相の廻向に就いて眞實の教行信證有り。」と言ふは、其の由つて來るところの淵源を知らしむる爲に外ならぬ。六要に科して「略標」と曰ふ所以である。

三經に一致門と差別門とあつて、和讃の一致門に據るは、佛徳讃嘆の爲にして、本典の差別門に據るは、眞假明斷の爲である。本典は差別門なれども、此の差別門中にまた一致門がある。則ち化土卷(本十四)に「三經の眞實は、選擇本願を宗と爲す也」と言ふの類である。諸家の註疏も、此の點に誤を爲すものは無い。評論するの要を認めぬ。

二に略して大意を叙する一段、初は彌陀の招喚、後は釋迦の發遣である。招喚は是れ本願、發遣は是れ成就である。「彌陀、誓を超關して」とは六要に釋して、「重誓の偈の意。彼の偈に説いて云く、我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん。」と曰ふ。此れは是れ満足願である。即ち光壽二無量の願である。亦是れ本佛の二利圓滿の妙果、無上涅槃の極果である。而して本佛の果徳莊嚴は、全く「三垢冥を消除して(十三)廣く衆の厄難を濟はん」が爲であるから、次に「我れ無量劫に於て大施主と爲つて、普く諸の貧苦を濟はずば、誓つて正覺を成ぜじ。」と誓ひたまふ。大施主とは願王である。即ち若不生者の誓である。普く濟ふとは、「廣く生死の流を濟ふ」(大下五)の義である。即ち十一願である。次に「廣く法藏を開きて、凡小を哀んで選んで功徳の寶を施すことを致す。」とは、六要に釋するに、「衆の爲に寶藏を開いて、廣く功徳の寶を施す。」の文を以てす。此の文、行卷の所引なるが故に、十七願の意なること明らかである。

三誓は、之を要約すれば、五願に配當すべきものにして、大經の大意として、「彌陀、誓を超發す」と言ふところに、此の義を含むべきであるが、六要に十七願を以て釋したまふは、教卷の當分に就くものである。即ち名號爲體の説に外ならぬ。南無阿彌陀佛は本願の招喚にして、亦是れ法界唯だ一法身あるのみなることを知らしむるものである。釋尊の大無量壽經は、全く此の十七願力に乗じて説きたまふところの「説微妙法」(釋光出佛)なるものである。

次に「釋迦世に出興して」等の文は、出世本懷の文である。他師は「道教」を以て能詮と爲し、「眞實之利」を以て所詮と爲す。此等の人は本願一乘の機に非ざるが爲である。今家は、「道教」を以て聖道權教と爲し、「眞實之利」を以て本願一乘の眞利と爲す。全く願心莊嚴の法門眼を得るからである。但し大經の中に道教を説くこと四ヶ處にして、その中、下卷に二ヶ處、初の一(大下六)は安養界中の説法なれば、之を以て聖道教と謂ふべきではない。經(大上二十九)に「波、無量の自然の妙聲を揚ぐ、其所應に隨ひて聞かざる者莫し。或は佛聲を聞き、或は法聲を聞き(大上二十九)に「波、無量の自然の妙聲を揚ぐ、其所應に隨ひて聞かざる者莫し。或は佛聲を聞き、或は法聲を聞き、或は僧聲を聞き。或は寂靜聲、空無我聲、大慈悲聲、波羅蜜聲、或は十力、無畏、不共法聲、諸通慧聲、無所作聲、不起滅聲、無生忍聲(初地)乃至(三、三、四、五、六、七、八、九地)甘露、灌頂(十地)、衆の妙法聲、是の如き等の聲、其の所聞に稱ひ、歡喜無量なり。」と説くが如きもの、皆是れ名號海中の波瀾、光海莊嚴の自然なるものである。此れは是れ法藏因位の至心修行の功徳寶海にして、元來聖道權假の法ではない。之を「道教」と言ふは、淨土中所説の道教である。然るに、此の功徳寶海を開説するに、集説と散説とがある。三世諸佛此の土に示現して、淨土の機縁未だ熟せざる前に、三乘を顯示して、斷惑證理の修因感果方便を説きたまふ。是れ即ち聖道である。此の法體は一なれども、此に

斷道の階次を施設して調機誘引するもの、是れ聖道方便である。序分に説いて「道教」(天經上三)と言ふものは是れである。今斯の文、前の「諸佛の國に遊びて普く道教を現す」(天經上三)の文を承けて、今の「眞實之利」の文に對するとき、之を聖道權假の方便と謂ふのである。「欲」の一字の安處を以てのみ斷すべきではない。

三に宗體を明にして、「是を以て、如來の本願を説くを經の宗致と爲す、即ち佛の名號を以て經の體と爲る也。」と言ふ。六要の釋、從容にして窺ひ難し、「願々の所詮、偏に念佛に在り。」と曰ふもの、其の言特に從容にして、元祖の化風に準釋したまふものである。一流の意に據れば、念佛は信心にして、信心の體名號なれば、一實圓滿の眞教の體は名號であると謂ふべきである。

直に文に就いて義を窺ふに、「是を以て」とは、上に大經の大意を叙して、彌陀は功德の寶を施すと言ふは、往相廻向の願の意にして、釋迦は眞實之利を説くと言ふは大無量壽經の意である。二尊の喚遣は一本願を以てするものである。而して釋尊の説法は、本佛彌陀の十七願力に乗ずる行如來德であるから、本願を説くが經の宗致であらねばならぬ。宗とは、宗要、宗尊の義である。大經の中には十九願成就の文たる三輩章もあつて、三輩と九品とは開合の異にして、三輩を説くところに、自ら觀經隱顯の義本を張るも、此は一經の宗要、宗尊に非ず、唯が彌陀の本願を説くを以て、別して一經の宗と爲すものである。

「即ち」とは、前の「説」の字を承く。本願を説くの大經は、即ち名號を讚嘆するものなれば、總じて一經所依の體を論すれば名號であるといふ意である。此れは謂はゆる所依體の義である。釋尊の能說能依に約するからである。然るに、若し我等が信眼に映するところは、名號流布の相の外はない。名號は信心の體である、一經文々句々、南無

阿彌陀佛ならぬものはない。此れは是れ當體體の義である。然るに、今は所依體の義であると云ふは教卷の位にして、行卷の位でないからである。發遣の釋尊に就いて之を論ずるものにして、招喚の彌陀尊に就いて之を決するものでないからである。之を要するに、願成就一實圓滿の眞教眞宗の體は名號である。教行不二なれども、喚遣且く其の位を分つて、法門を鮮明ならしめんとするものである。

謙敬院隆英和上の論註の講録に、宗體を論ずること頗る綿密である。今其の説を擧げて、後進の參考に資せん。

先づ經體を辯ぜば、凡そ諸家、體を論ずるに能詮體あり、所詮體あり。法相家には能詮體を明す。義林章一の二十三丁、經體に就いて大小を分つ。小乘經體に六門を出す。又大乘に就て、偏體と中道體とを明す。廣く辯じて云々す、又唯識二の八丁云々。又天台家は、所詮を以て體を辯ず。妙玄八の二十七丁に「體は一部の旨歸、衆議の都會なり。」と。又起信義記上二十丁に「體は所能詮に約し、宗は所詮に約す。能詮教體に四門有り。」と云々。又妙玄八の六十六丁に「一法の當體」の文有り、又所依體の言有り云々。

他宗の所談は、且く之を措く。今宗乘に就いて之を辨ずるに、約本、約末の二義有り。約本に就いて辯じたまふが高祖教卷の所明なり。約末に就いて明したまふが終南玄義分の釋なり。今論註は、約本の義に就いて經體を明したまふ。淨影の觀經の義疏(五丁)に曰く「第三に宗體を辯ずれば、宗を以て體と爲す、體を以て宗と爲す、宗體異なることなし」と曰へり。天台家には、大いに之を非と爲す。故に妙宗鈔二の二十七丁に「有人云く、宗、即ち體なり、體即ち宗なりと。今用ひざる所なり。何となれば、宗は已に二なり、體は即ち一なり。體若し是れ二ならば、體は即ち體に非ず。宗若し不二ならば、宗は即ち宗に非ず」云々。今此の論註は體を明して、宗を明したまはず。然れども宗體

二なること無論なり。

體に就いて、當體體と所歸體と所依體の三別有り。當體體とは、義林章本三十二丁に「當體に名を顯すを以てするあり、或は義に就いて目とあるあり」等。又起信義記上二十五丁に「大とは當體を名とす」等なり。

又所歸體とは、宗の歸趣するところを以て其の體とす。玄義分宗旨門に、念佛三昧を以て宗と爲し、觀佛三昧を以て宗と爲し、一心廻願往生淨土を體と爲すが如し。此の兩宗の歸するところ、一心廻願往生淨土に在るが如し。

又所依體の義は、妙玄九十五丁「所依の體は妙體にして異なし、能依の法は法に龜妙有り。能依と所依と相對して、所依を體とするなり。又肇論の疏に「體は依なり。涅槃は本名相無し。萬法所依の體と爲る」云々。彼の義林章の能證を以て體とする義に同じからず。

此等の釋の中、今所依體の義に依つて經體を辨せば、體に體質の義有り、主質の義有り。體質の義は、觀音玄義第四の十如是の釋に、第三の體を釋して體質と云へり。體質とは、形有るものを質と云ふなり。又主質の義とは、天台觀經の疏に「經體とは是れ主質なり。主質とは、主は物の依る義にして、所依となるをいふなり。」と云へり。此の所依に就いて、天台は玄義二十丁に「實相を指して正體とす。是れ萬法の所依と爲る故に之を體といふ。」と云へり。

今宗乘に依つて之を釋せば、名號を以て實相法と云ふ。實相法と云ふは、天台の如く非因果の法に非ず。修因感果の名號は、法性に順じ、法本に乖かざる名號なるが故に、實相法と云ふなり。是れ大經所依の正體なるものなり。問うて曰く。如何が所依の正體と爲るや。

答へて曰く。大經一部、序正流通の三分有りと雖も、彼の我名を讚嘆する外無し。能讚を以て能依と爲す。所讚の我名は略なりと雖も、一經所説の衆義の都會する處、此の名號に在り。是れ所讚の我名を以て所依と爲るが故也。

又法に約して言へば、無量壽の三嚴、若くは因位の願行、若くは果上の依正、名號を以て體とせざるは無し。何となれば、四十八願、一々願じて、若我成佛不取正覺と言ふ。正覺とは南無阿彌陀佛なり。然れば願は名號を以て體と爲したまふ。故に「南無阿彌陀佛といふ本願をたてましくて」(御文五帖第八通)とのたまふ。又兆載永劫の修行の成就するところ、唯だ名號に在り。是れ名號を以て體と爲る也。又彼の土の依正、主伴、名號ならざるなし。之を題號に無量壽經と言ふ。是を以て、法に約して名號とし、部に約して名號とす。然れば一經所依の體は名號に在り。之を天台の法華玄義八の二十七丁に「體は一部の旨歸、衆義の都會なり」と言ひ、釋疏には「部に約して嘆ず。衆義の都會とは、本迹二門皆實相に歸し、一代の義旨悉く體に契ふ。」と言へり。彼の釋は、實相を以て正體と爲す。今は名號を以て正體と爲す。主質の義是の如し。

又體質の義とは、觀音玄義に「心を以て體と爲す。乃至証とは、釵鑰銀鋼の珠、皆銀を以て體質とす。」と云ふ。此の釋意は、其の品種々あれども、其の體は銀なりといふ喻なり此の釋に依つて體質の義を見るときは、大經一部、無量壽佛の莊嚴功德を説きたまへども、其の法體は名號なり、といふ義となるなり。然れども、此の體質の義は、宗體の釋には非ず、十如是の中の第三の體を釋したるなり。今は天台に準釋するに、前の所依體の義に依るを善しとする也。

問うて曰く。宗は宗要の義、體は主質の義にして、宗體同じからざるは敢て命を聞く。然るに未だ宗の名義を聞か

す、其の名如何。

答へて曰く。妙玄九の三十丁に「宗は修行の喉衿、顯體の要蹊なり」と。同一の一の三十四丁に「宗は要なり。如何が要と爲す。無量の衆善、因を言へば攝す、無量の證、果を言へば攝す」と。此れは宗要の義に約す。又同一の二の八丁に「宗は猶し尊主の如きなり、國に二王無し」と。又弘決一の一の十丁に「宗は尊なり、主なり」と。又元照の觀經の疏上七丁に「宗は是れ主の義」と。又戒度の記上に、主を以て宗を釋す。「即ち三義有り。一には獨尊の義、天に二日無く、國に二主無きが故に。二には統攝の義、網の大綱の如く、衆頭の如きが故に。三には歸趣の義、星必ず北に拱す、水定んで東に朝するが故に、今經の主、此の三義を具す」と。此等の釋に依るに、宗要は一部の肝要を顯す。獨尊は一部の尊宗するところ、統攝の義は天台の謂はゆる衆義の都會するところと言ふが如し。歸趣の義は宗の趣くところを以て宗趣の義と爲る也。

今註の上に宗の義を觀ふに、高祖に依るに、三經往生文類の中に大經の宗を明して、念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果を得るを經の宗と言ふ（三經往生文類）然れば、願因願果を以て大經の宗とするが往生文類の意也。之を論註の上に見るに、三願的證の上に見ることを得る也。

問うて曰く。六要に宗體を釋して、總別を以て異と爲す」と曰ふ意如何。

答へて曰く。本願爲宗は相對門に約し、名號爲體は絕對門に約す。先づ本願爲宗を相對門と爲すは、六八願の中に方便願有り、眞實願有り。眞實願は一部の宗要、之を尊崇せざるは無し。故に方便願を取らず、眞實願を取つて其の

宗要を顯すを本願爲宗と言ふ。要不要相對する故に相對門と言ふ。又名號爲體を絕對門と爲すは、體は主質の義にして、一經所説の法、名號を所依と爲さざるは無し。彼の十九、廿の方便願有り、三輩等の方便願成就の相を説きたまへども、一部の所詮は唯だ名號に在り。爲實施權の方便を説きたまへども、是れ皆名號海に入らしめんが爲の化用なるときは、此の用永く獨立せず。是の故に用を攝して體に歸すれば、名號は一經主質の義にして、經體絕對の義を成す。宗體を絕對門と相對門と爲すは是れが爲め也。

已上讃敬院の説を其のまゝに擧げたるものである。相對門、絕對門の名目は、其のまゝに用ひ難き歟。六要に總と言ひ、別と言ふもの、最も穩當かと思ふ。但だ六要に念佛と言ふは、他流に對する與奪の深意ある爲ならん。約本門の所依體の義に非ず、約本門の宗の歸趣するところを體と言ふの義に準ずるか。而して斯の約末の義を約本に還すときは、念佛は則ち南無阿彌陀佛にして。是れ大經所依の體である。所依は是れ名號、能依は是れ大經であるからである。又南無阿彌陀佛は即ち正念（信心）である。此れが願心莊嚴の法門であるから、能依の大經は釋尊發遣の正意を顯して、本願成就の文を説きたまふ。成就の文は斯の信心を顯すに外ならぬ。六要は、願々の所詮偏へに念佛（信心）に在るが故に、之を我等に與ふる一實圓滿の眞教たる大經の所談も亦茲に在ることを釋したまふものである。法門は自然に展開する、此れ亦名號流布の莊嚴相であらねばならぬ。六要の釋の從容多含であるは、却つて末徒の知見を開かしむるもので、容易に看過すべきではない。

天台に因果爲宗、實相爲體と言ふものと、今家の本願爲宗、名號爲體と判するものと、善く似てゐる。三經往生文

類に、念佛往生の願因に報いて必至滅度の願果を得るを大經の宗と爲す、と言ふは、全く本願の因果を以て大經の宗と爲すものである。法華經は聖道教なるが故に實相爲體と判すべく、大經は淨土教なるが故に、實相法たる名號爲體と斷すべきである。先輩茲に著眼せるは宗意を得たるものならん。而して諸法實相は諸佛の自内證にして、名號實相法は二利圓滿の眞實功德相である。名號流布の外に實機の眞利有ること無きを顯すが大無量壽經である。之を本願一乘と言ふ。且く能依と所依とを分てば、大經は是れ能依にして、名號は是れ所依であるが、能所も是れ「如來尊號甚分明、十方世界布流行」の莊嚴功德相である。

附言

六要の「願々の所詮偏へに念佛に在り、之を以て體と爲す」と曰へるは窺ひ難し。上に縷述するところ未だ安んぜず。且く記して後賢の是正を待つのみ。

六要主の釋意は元祖の教意に據るものである。外西鎮の徒も見て之を怪しまぬところであらう。併し法門は自然に展開するものである。約末の釋意は、願々皆念佛往生に歸せざるはなしとする。宗の歸趣するところを體とするものである。而して約末は約本に還るものであるから、高祖の稱名破滿下の轉釋を成ずる。行卷は攝末の始に凝滯せず、歸本の本城に還らしめる。之に準じて、斯の六要の釋も、亦元祖の教語を高祖に還すべきである。六要は約末の釋を施して、却つて約本の高祖を仰がしむるものである。約本から約末を垂れ、約末から約本に還る。大權自然の法門三昧に在つて、任運に斯の妙釋を爲すもの歟。六要を以て祖意を知らずと爲すものは、我黨の與せざるところである。

記して後進の参考と爲すのみ。

評林 (其一)

略叙大意

總じて教旨を標する中に、略して標す、略して大意を叙す、經の宗體を明すの三段有る中、第一の略して標すの一段は、六要の科文最も適當なるに、先輩多くは之を眞宗の玄規を高顯せるものと見たるは、恐らくは高祖の意許に非ざるか。其の他は別に評論すべき程のもの無し。第二、第三就いて諸家の説を評論すれば足る。

一 樹心錄 卷一の八

「吉水の大經釋に云く、彼に喚び此に遣はすと。此れ乃ち是の經の大意也。今、彌陀超發等と言ふは、即ち彼に喚ぶ也。釋迦出興等と言ふは、乃ち此に遣はす也。」と云ふは、能く文意を得たるものである。又超の字を釋するに、「唯だ大本にのみ超の字を説くこと二十有二」と云ひて、一々之を解したるは、努力せるものと言ふべきである。

二 略讚 卷二の三

「今謂く、超發、廣開の二句は因位の願行を明し、致哀等の二句は果上の回向を示す。超發於誓とは、法藏菩薩、

六八の大願を發すなり。」と云ふ。祖意果して、誓を超發するの語と法藏を聞くの語とを、願と行とに配するの意としたまふや。此の文は語を三誓の偈に取る。又此の偈文を行卷に引用して十七願の意と爲したまふ。名聲超十方の相であらねばならぬと思はれる。略讀に同意し難し。

又「光闡道教等とは、光は廣也、闡は開也。諸師の意に依れば、法を教へ人を利するを名けて道教と爲し、理を證し物を益するを以て眞實と爲す。」と云ふ。諸師の意は、道教とは能詮の教、眞利とは所詮の理と爲す。一乘眼無きものが、此の處にて出世本懷を窺ふ能はざるは無理も無いことである。

又「若し所解（劍云く。諸師の解を指す）の如くならば、則ち欲の字當に光闡道教の上に在るべし。今既に爾らず。知んぬ、文理に順ぜざる也。」と云ふは、容易に左祖し難し。何となれば、化土卷本（十九）に「言彰者、彰眞實難信之法。斯乃光闡不可思議願海、欲令歸無礙大信心海。」と言へるが如く、欲の一字の安處のみを以て、眞實と方便とを分割すべきものではないからである。

三 徵

決 卷二の二

大意を釋するに四門を設く。一に所承、二に所據、三に對文、四に文義。一に所承とは、黒谷の大經釋を承け、遺喚の次に據ると云ふもの好し。二に所據とは、「招喚は三誓偈の文に依り、發遣は大經の序の文に據る。」と云ふもの好し。三に對文を辨じて、「彌陀は衆の爲に廣く眞實、方便の願を開き、釋迦は衆の爲に隨自、隨他の教を光闡す。」と云ふは誤である。法藏は是れ功德の大寶海である。之を一名號に統攝する外に、何等の不眞實なるものゝ有るべき

筈はない。名號海中何の方便か有らんや。強ひて文を對照せしめんとするの技巧に過ぎぬ。

又一説を出して、「光闡道教は但だ是れ方便、廣開法藏は然らず。」と云ふは好し開法藏とは法藏は彌陀大悲自所證の一如法海藏、謂はゆる正迫大慈悲出世善根の悲性也。法藏菩薩は此の性藏を開き選んで功德の寶を施す。此の一如法界は彌陀の所證にして、此の一如法界より形を垂れ名を示し、法藏菩薩と現じて誓を發すなり。選施とは、則ち正覺の彌陀も亦此の法藏中より出づ。」と云ふもの、恐らく高祖の意に非ず。三誓の文意は性海を言ふものでもなく、高祖行卷の引意も亦悔海を語るものではない筈である。穿ち過ぎたる説である。末學の分別には、往々是等の技巧に過ぎたるものがある。後學の注意すべきところである。前車の覆るは後車の誡めである。素心聖教を見るものは惠まれたる哉。徵決の此の見解は、踏躰記の「隨自隨他無量の法門藏、恐らくは教法に約する乎」と云へるものを踏襲せるか。但だ躰記の教法とせるを破して、自ら之を德行とせるまでである。直に祖典を拜して得たる義解に非ざることが知らるゝ。後進は之を懼れよ。

四 述

聞 十二

「謹按淨土眞宗」等の文を、「總じて法門を開拓す」と科するは、從來の諸家が眞宗の玄規と爲すものよりも文勢に進し。此の處にて一科を設けたるは、六要に満足せざりしものと見ゆ。聖教を輕視するものは、雄渾自然の妙を得ることは難い、「祖意は大無量壽經是れ也」に到つて一段落を爲すものである。「也」の字を置くは此れが爲である。廻向を釋して、「一體の妙法、即ち自利、即ち利他、故に南無阿彌陀佛の廻向の等と云ふ。廻向とは、論註、安樂集、

要集等に名義を釋するが如きは、並に是れ常途なり。今は則ち他力の異稱にして、回自向他を義と爲す、謂ふところは、佛の自證を回して、他の衆生に向ふが故なり。」と云ふは、宗義を得たるものか。

「廣開法藏」を解して、「性起の正法、因人親はざるを、謂ひて法藏と曰ふ。大願修起して、周遍遺さず、故に廣開と云ふ。有が曰く、隨自隨他無量の法門藏、次下の光闡道教等に拘るに似たりと。若し必ず彼に對するならば、今の句は止だ隨他に應ず、故に非なり矣。」と云ふは、評破するところ當を得たるものである。

「選は謂く選擇、廣開は即ち是れ選擇、施は謂く、廻施、徳功實とは、謂く佛の名號。斯れ則ち總じて如來の願力を嘆じ、經文を安排するなり。義意知る可し。」と云ふ。此の師が法藏とは、性起の正法と云ふ、必ずしも理性を云ふのではあるまい。廣開は即ち選擇にして、選擇せるところ功德の實は是れ名號であるとすれば、文意未だ盡きざるものがある。思ふに、廣く法藏を開くは、之を與へんが爲である。選擇は、與へんが爲に之を攝取するものである。廣開法藏とは説法獅子吼に外ならぬ。行卷の引意に據るに、此の文は十七願の意にして、第十八願の選擇攝取を讚するものでないからである。

諸解紛々たるも、唯だ祖典に照すときのみ、祖意のあるところが窺はれる。

「欲の字、意深し、佛の本懷を顯し、宗歸を示すが故に。」と云ふは難無きか。出世本懷の文とするの義は、之を辯ぜず、物足らぬ心地す。

五對問記 一の四十

「本佛の願海を光闡して、以て釋尊の本懷と爲す、是を大經と爲す。」と云ふは簡潔である。招喚も發遣中の招喚なるが教卷である。

廣開法藏を解して、「三願開説、是を廣開と爲し、弘願獨立、是を選施と爲す。」と云ふ。今は之に従はぬ。其の他に發揮するところ無し。

六敬信記 卷二の八

廣開法藏を解して、古來の四義を列舉し、「上來四義の中、第四義深甚也。」と云ふ。第四義とは、法藏とは久遠の所證を指すといふ義である。別に發揮するところはない。

「欲の字光闡道教の句の上に在るに非ざれば、他師の釋は成ぜず。」と云ふ。此の師は、別に發揮するところ無きも、唯だ諄々として説くところ法味津々たるものがある。門下三千、化風一世に振ひたるは欣仰するに足る。

評林 (其二)

經の宗體

一樹心錄 卷一の十三

體に二義有りとして、一に能詮の教體、二に所詮の教體を分つて、今宗の意は「宗の歸する所を體と爲す」と云

ふ。之を以て玄義分を解するは可なれども、今典には必ずしも當らぬ。

又三經に通宗通體、別宗別體有りと云ひ、愚禿鈔の三往生下の「大經の宗」等と言ふものと、論註の名號爲體とを引證するは、約本と約末の法門を分別せざるものである。玄義分は、機に約して、「一心廻願往生淨土を體と爲す」と云ふ。此の時は念佛三昧を以て宗と爲すべきである。今本典は、約本門の法義なるが故に、本願を以て宗とし、名號を以て體とすと判じたまふ。此の法門を混雜して、一列に論註と愚禿鈔とを引くは當らぬやうである。天台に據つて、體とは必ず宗の歸趣するところなり、とのみ取るより來る錯覺である。

二 略

讚 卷二の十二

六要を破して「惣じて六八願を以て宗と爲さば、十九、二十願も亦今經の宗たることを得。若し爾らば實教に依つて權宗を立すると謂ふ可きや。乃至是を以て六要の所明、據り難きこと之を思へ。」と云ふ。六要主の六八願を宗とし念佛を體とすと曰ふは、普通の與門である。則ち元祖法門を學ぶ人の意に逆らはぬものにして、四十八願即一本願の法門に、眞假を別論するの要を見ざるものである。實教に依つて權宗を立するといふ難は、笑ふに堪へたるものである。六要の與門は竊かに奪門を含む。何となれば、念佛は即ち南無阿彌陀佛であると知つたとき、約末の法門は約本の法門を展開して、一經所依の體は是れ名號なることが知られ、名號爲體の知られたとき、一實圓滿の眞教の宗は本願なることが知られるからである。記主が、大權の施すところ、法門自然の展開なることを知らず、漫りに之を難破して顧みざるものは無慚無愧の至りである。

「今家の宗體は彼（天台）の所判に似たり。何となれば、如來の本願を宗と爲すとは、一本願（第十八願）の五願を取つて宗と爲す。」と云ひて、偈前の文の「大無量壽經の宗致、他力眞宗の正意也。」の文と對應す。又「以佛名號爲經體とは、即ち一經所讚の法體を究むるに、唯だ此の一法に在り。」と云ふは體當である。

又「今釋迦教中の誓願名號を承けて宗體を明し、誓願を宗と爲し、名號を體と爲すが故に、文に、如來の本願を説くを經の宗と爲す、即ち佛の名號を以て經の體と爲す。説の言は能説の釋迦に在り、以て言説之を用ふる也、之を思へ。凡そ宗體を論ずる、皆釋迦の説教に於て之を言ふ。」と云へるは、我が意を得たるもの、先哲苦心の蹤は之を追はねばならぬ。本願を説くを經の宗と爲し、名號に依つて經の法體を立つるは、十七願力に乗じて此の土に示現せる釋尊の行如來徳の使命であらねばならぬ。記主この意を得ながら、前の大意の文に廻つて、「爲衆開法藏、廣施功德寶」の文の十七願の意なることに徹せず、漫りに因願、因行、果徳段に配釋せんとするは迂遠である。祖典をして韜光せしむるは、之を拜するに法身を瞻仰する恭敬心を以てせぬからである。我等をして漸々に其の心眼を開かしたまふは皆恩徳である。噫

三 徵

決 卷二の十二

宗體を論ずるに、廣く支那人師の説と今宗列祖の義とを列ねて辯ずるところ委曲である。後進を啓發するところ少くない。説は評記を追はんとするものか、別に發揮するところは無い。

四 述

聞 一の十六

大教王經を引いて、宗體もと經說なることを知らしむるは、石泉師の博覽の賜である。

「余先には謂へらく、集主少くして良嶽に在りて台宗を習學したまふ。云ふ所の宗體は、蓋し是れ彼に准説するなりと。熟思するに然らず。集主の釋、時に似たるもの有りとも雖も、未だ必ずしも咸く准ぜず、何ぞ強會するを須るん。故に改易して曰く、此れ還つて註家の言を詳明するもの也と。謂く註家は一門に據つて、體を以て宗を收め、集主は別門に就いて、體を開いて宗を出し、以て註家の釋に含蓄を存することを示す。其の義云何。註家の名號爲體と云ふは、彼の下卷に云く、彼の無碍光如來の名號は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満てたまふと。乃至然者稱名憶念等と曰ふは、第二十願の名號、非を擧げて以て其の是なる者を反顯するなり。經體を明す中に此の義を含蓄す。而るに人知らず、別して開示する所以也」と云ふは、發揮するところ有るものである。

又「六要釋して云く、總別を異と爲すと。叙曰く、止に準無きみに非ず、亦集主の意にも非ず」と云ふ。末學の六要を破すること、一大虚に咆へて萬大實を傳ふるが如し、呵々。

五 對

問 記 一の四十九

「今師の開宗、具に宗體を辨す。名號爲體は正しく註家に承け、本願爲宗は義を釋家に則る。謂ふべし、法義周足せり矣と。復た其の宗體は共に所詮に約す。名號爲體とは、體は謂く體質。六字の嘉號を經の體質と爲す。謂く一

經、六字を詮し、六字、一經に徹す。文々句々唯だ名義を詮し、片言隻字、名號に非ざるは無し。一經舉體唯だ是れ名號の故に名號爲體と云ふ。本願爲宗とは、宗は謂く宗要。一經の願末、衆義森々たるも、其の要は獨り本願に在り。其の本願とは第十八願是れ也」と云ふ。頗る疎枝大葉的である、別して評論するの要も無き歟。

六 敬

信 記 卷二の二十五

宗體を辯すること丁寧である。此の師の風格を見るに足る。要するに從來の説を整理し、諄々として辨明せるものである。

六要を破するも、其の云ふところ過激に非ず。「今私に思ふに、六要主の願々の所詮偏へに念佛に在りとは念佛を體とす。此の念佛とは口稱の意ろ歟。若し然れば西河終南等の念佛爲宗の義となりて、體とは云ひ難からんと云ふ。法門自然の展開を知らず。説くところの願々を念佛に歸するは趣歸體である。且く約末門の義であるが、此の約末は直に約本に還つて居る、念佛は則ち南無阿彌陀佛であるからである。此のときは、所依體の義となる。是れ元祖法門より高祖へ還るの自然である。強ひて難すべきではない。

「然るに今通じて本願と云ふが六八を指すとは、少し肯んじ難し」と云ふ。此れも六要主が且く準通門に立つて、之を與へたるまでであつて、先づ斯の關門を透過して、高祖の本願爲宗が開け來ることを暗示したまふものである。凝滞するところ無きものは、茲に自ら別顯門の密意あることを窺ふべきである。

自ら宗體を辯じて、「今此の宗體を解するに、先づ宗は謂く宗要、因果二法即ち本願是れなり。體は謂く體質、實

相一法即ち名號是れなり。」と云ふ。從來の説を承けて、之を穩に示したものである。又本願爲宗の相承を辯じて、「名の備つてをる所より取ると見れば、則ち終南の念佛爲宗に依ると云ふ可し。義を云へば論註の文と云ふこと明白也。」と云つて、約本門と約末門とを分別料簡せざるが如き、穩和にして諍ひを好まぬ風が見られる。穩和なる人は斷案を下すの力足らず、峻烈なる者は脱線すること多し、素心にして聖典を拜すべきである。

附 言

「廣開法藏」の文を古人の苦しみたるは、經を解するに經を以てせざる爲である。經に言はずや、「爲衆開法藏、廣施功德寶」と。經に説くところの水壘樹林、若しくは講堂精舎の大菩薩法は、是れ法爾常恒の本佛の説法である、一立古今然の淨土なるが故に。一法身の光海莊嚴、散じて十方三世の諸佛の佛事となり、凝つて安養淨土の莊嚴となる。諸佛法の如きは、法身常恒の説法は唯だ諸佛の自境界である。彌陀は然らず、悉く開いて之を與ふ。然れども法爾常恒の自境界は、直に以て實凡實機に施すべからず、選擇の本願是れが爲に興る。即ち凡小を哀んで選んで功德の寶を施すものである。所選擇と選擇と元來一法の上に緣起する。之を法界緣起と爲す。然るに華嚴は、之を十佛の自境界として説き、本佛彌陀は、願心莊嚴の法門の體として、能く廣略相入の妙境界を莊嚴す。衆生有碍の妄分別を以て思議してはならぬ。廣開は廣修の義也とは、之を解せざる爲である。

「念佛爲體」は元祖の法門、是れ從本垂末門である。必ず攝末歸本して願心莊嚴の法門となる。是れ高祖法門である。而も遂に輾轉して時機に投じ、また本源に還らしめる。大權の法門は凝滯するところ無し。六要主は自然法門を達觀して、而も與奪を爲す、實に大悲の善巧方便である。之を怪むものは輾轉の義を知らざるのみ。

「廣開法藏者、光海莊嚴之風光也。光海莊嚴不同與波十佛自境界、二利圓滿之妙果也。斯功德寶者、發爲十方三世之佛事、凝爲安養自然之莊嚴。是故水鳥樹林、波揚風蕩、皆是廣開法藏之相也。若夫應身化儀者、機之而施設從因果果斷證之法門。是爲光闡道教。然其體是一、固是光海之波瀾而已。謂之爲秘密莊嚴者、爲機闕未調而已矣。法爾常恒之廣開法藏、一立古今然之功德莊嚴、何密藏之耶。故言廣開寶藏。然與之于實機、則選爲名號法。亦是爲凡之教意而應實機之善巧方便也。」

淨土の莊嚴功德の上には廣開法藏、釋尊の調機方便の上には光闡道教、固と是れ法藏因位の至心修行の道法であるが、之を名號海の波瀾と見るときは、法藏と云ふ。之に從因至果斷證の施設方便を加ふれば聖道法と云ふ。其の體六波羅密である。

第三章 徵文—出文—總結

「何を以てか出世の大事なりと知ることを得るとならば、大無量壽經に言はく。今日世尊、諸根悅豫乃能く過絶すること無しと。已上

無量壽如來會に言はく。阿難佛に白して言さく。乃能く如來に如是の義を問へりと。已上
平等覺經に言はく。佛阿難に告げたまはく。乃善く聽き諦に聽けと。已上
憬興師述文贊の云く。今日世尊住奇特法といふは、乃即ち如來の德なりと。已上

爾れば則ち、此れ眞實教を顯す明證也。乃至時機純熟の眞教也。應に知るべし」

教卷は出世本懷を顯すが要である。正信偈の「如來所以興出世、唯說彌陀本願海、五濁惡時群生海、應信如來如實言。」の意である。

總結の文に照して之を知る。

此の中、五徳示現の文、六要に他師の釋を引用して、自解を述べざるも、六要主の意の在るところは自ら知られる。「寂の云く。謂く三世の佛更に互に所住の功徳を相念す。今の佛、諸佛を念すること無きことを得ん耶とは、謂く今世尊必ず諸佛の徳を相念すること有る也。得無と言ふは、謂く必ず有る也、下に耶を置くが故に。即ち我が世尊釋迦牟尼佛、彌陀法身淨土の因果の功徳を念す。旨を承けて相を觀るに、必ず有ることを知る也。」と曰ふもの、六要主の用ふるところである。義寂の説は、諸佛を以て彌陀如來と爲し、釋尊の奇特法に住したまふとは、是れ念佛である。即ち彌陀法身淨土の因果の功徳を念するものと見るものである。念諸佛耶の文を解するに、一經所説の淨土の因果功徳であると云ふは、經を以て經を解するものである。眞要鈔本(二十)に「それ阿彌陀如來は、三世の諸佛に念ぜられたまふ覺體なれば、久遠實成の古佛なれども、十劫已來の成道をとなへたまひしは果後の方便なり。」と曰ふは、此の經文に據つて、久遠實成の義を立するものである。

若し之を願海に探れば、十七願の意にして、若し之を莊嚴の上に觀へば、華光出佛である。高祖の讚して「久遠實成阿彌陀佛五濁の凡愚をあはれみて釋迦牟尼佛としめしてぞ迦耶城には應現する」とのたまふは、是れ法界統御の願王の法門、一立古今然の莊嚴功徳相である。之を娑婆示現の釋尊より云へば、融本の應身であるが、之を極樂莊嚴よ

り云へば、本地を動ぜずして化用を垂るゝものである。先輩が諸經の教主を隨末の應身と爲し、大經の教主を融本の應身と爲すは此れが爲である。而して華嚴に、十身具足の毘盧舍那法身を以て教主と爲すが如きは、定中説法の相にして、華嚴三昧中の風光を説くものであるから、實機の實益に關からざるものである。眞言の法身説法も亦之に準じて解すべきである。

五徳は、之を分つて二と爲す。一に入徳、二に出徳である。異譯に之を「入大寂定、行如來徳」と言ふに照して知る。入徳の中、住奇特法は總にして、之を開いて住佛所住、住導師行、住最勝道と爲すは別である。大寂定は大涅槃定である。涅槃經に言はく「大寂靜の故に、名けて大樂と爲す。涅槃の性は是れ大寂靜なり。何を以ての故に、一切憤關の法を遠離するが故に。大寂を以ての故に、大涅槃と名く。」(眞佛土卷九引用)と。大經上(九)に説いて「是れ我が眞證なり」と言ふ、即ち一如法界である。本佛久遠の眞證である。涅槃に三徳が有る、法身と般若と解脫である。佛の所住は法身である。六要主が「無量壽は法身常住の妙理」と曰ふは此の意である。導師の行は般若である。六要主の「無量光は佛智觀照の妙用」と曰ふは此の意である。即ち本佛の光壽海である。本佛は之を以て最勝の道を得たまふ。涅槃經に説いて、「無上は即ち眞解脫なり、眞解脫は即ち是れ如來なり。」(眞佛土卷六引用)と言ふは是れである。若し宗義に據つて此の經文を見れば、諸佛如來は阿彌陀如來である。無上は獨り久遠實成の阿彌陀如來であらねばならぬ。之を二利圓滿の妙果と云ふ。已に「釋迦牟尼佛、彌陀法身淨土の因果の功徳を念じ」と云ふ。願王の莊嚴功徳相を念するもの、本願圓頓一乘法を説いて其の大使命と爲したまふは宜なる哉である。故に次に出功徳を説いて「行如來徳」とのたまふ。行如來徳は、「一々の諸佛、又百千の光明を放ち、普く十方の爲に、微妙の法を説きたま

ふ。〔大經上三十三〕の相である。

六要に出世本懐の文を釋して、「今、宗義に依るに、道教と言ふは、光く一代を指す、益、五乘に亘る。眞實利とは、此の名號を指す、即ち是れ佛智なり」とは、六要主の常に談するところの佛智一乘の義である。此の擇法眼を得ざれば、聖淨二門の權實を談すべからざることを教ふるものである。經に本願疑惑の行者を指して、「此の諸智に於て疑惑して信ぜず。」〔大經下二十九〕と言ふ。註論には、一無明を破するところ、一切の無明を破す、とのたまふ。一代道教は之を散説し、大無量壽經は之を集説す。もとは法身の光輪に外ならぬものである。益五乘に亘ると曰ひ、即ち是れ佛智なりと曰ふもの、語は緩なれども、與奪の深致を含むものである。

「眞實之利」を釋して名號と爲し、流通の「爲得大利」と照應し、胎化段の「爲失大利」と對照したまふは、一經の體は名號なるが爲である。高祖は大經讚に、「如來興世の本意には、本願眞實ひらきてぞ、難値難見とときたまひ、猶靈瑞華としめしける」とのたまふは、釋尊の開説するところ、本願を以て宗としたまふからである。

名號は是れ三世諸佛の傳寶である。釋尊は十七願力に乗じて娑婆に出現し、名號を體として本願を開説したまひ、斯の功德寶を以て當來補處の彌勒に傳ふるは、流通無盡を顯すものである。名號爲體、本願爲宗は茲に明らかである。六要の眞意は、茲に到つて顯彰せられる。

評 林

一 樹 心 錄 卷一の十四

「此の五相、逆次に五智に配す。前四を別と爲し、第五を總と爲す。五智は即ち次の如く法界體性、圓鏡、平等、妙觀、成事智也。内證を住と爲し、外應を行と爲す。」と云ふ。宗乘を發揮するに足らざるもの歟。

又出世本懐の文を解して、「一には理を顯すの權實に約し、實を顯すを本懐と爲す。二には益生の廣狹に約し、益の廣きを本懐と爲す。法華は實理を顯すと雖も、但だ在世正法の時にのみ在つて、利智精進の機爲にす。是の故に生を益すること廣からず。念佛は普く在世正法、像末法滅の時に通じて、五乘をして齊しく一眞如海に入らしむることを致す。是の故に生を益すること最も廣し。而も實に入ること速疾なるが故に、念佛の功其れ高き也。」と云ふ。素朴の説にして、法華の高才達識に及ばざるもの歟。(存覺上人に、法の權實と機の利鈍に約するの説があるが、法の權實は彼の法華の説くに任せ、機の利鈍は終南の説に従ふ。而して竊かに利根の機を以て權機と爲し、鈍根の機を以て本願の正機を彰すが故に、之を一轉すれば、本願一乘絶對不二の機教を達觀せしむるの密意を含むものである。樹心の説の如きは、五乘齊入は相對門の説であつて、且く聖道の所談に對向する一應の法門であり、一眞如海は無明海を翻轉して、本願一實に歸入せしむる眞宗の極談であることを分別せざるかの如き辯となる。大權の筆致は法門自然の無限の開展を顯し、末學の分別は、斷片的分別を以て構想の基礎と爲すものである。宗門の學徒、善く之を鑑

識せねばならぬ。六要の釋義は、且く相對門に據すれども、密に絶對門の義を藏して居る。何となれば、「岸上の者、何を用てか濟ふことを爲さん。」(支論分十一)といふ文には、幽かに、聖道の衆者は既に佛と成りたまへる岸上の人なれば、何ぞ濟ふことをせんや、二乘開會の利益は、蘭林遊戯の示現相に外ならぬ、といふ意を含むからである。

二略

讚 卷二の十五

「今謂く、上の大意の釋迦出興於世の文を承けて徴起するなり。」と云ふは好し。

五徳示現の文を解して、「此の五句を攝して、二と爲す、謂く入出二徳也。何を以て爾か知るとならば、如來會に、入大寂定行如來行と言ふが故に、大寂定とは、謂く無上涅槃、全く是れ彌陀の妙果なり。回向の名號を衆生に與へて、共に説いて奇特法と爲す、即ち六字嘉號の念佛三昧也。乃_五 初の四佳は是れ入門にして、是を總句と爲す。此の中に法身、般若、解脱の三徳を具し、開いて別と爲す。乃_六 此の總別を合して入と爲すが故に、入大寂定と曰ふ。謂く、釋迦、念彌陀三昧に入りて、彌陀と無二無別也。第五の行如來徳は是れ出門なり。此に至つて始めて釋迦なることを知るが故に、乃_七 云何が如來徳を行するや。經に、如來以無蓋大悲矜哀三界と説く、是れ其の相也。乃_八 因に在つては則ち皆遵普賢と爲し、果に在つては則ち行如來徳と言ふ。阿難の權徳密に知りて、能く如來是の如きの義を問ふなり。」と云ふもの大いに佳。余が前に辯するところ、全く之に隨ふものである。又出世本尊の文を解して、「諸家の言ふ所、皆是れ相對門に據る。按ずるに祖意必ずしも然らず、絶對門に約して出世の正意を論じたまふ。乃_九 其れ法華に於て大事因縁を論ずるは、是れ但だ娑婆一應化の道ならくのみ、一乘三乘の權實を説くが故に。他方の淨土豈

夫れ然らんや。」と云ふ。絶對門に著眼するは好し。されど論註を以て之を立論せんとするは、期だ直に當るものではない。何となれば、論註は、一地より一地に至るの説は一應化の道にして、速得菩提は應身の化儀を以て之を判すべからず、といふ意である。論註再應の深義は、願心莊嚴の法門を以て本願一乘を語るものであるから、記主の言はんとするところ無きにも非ざれども、辯するところ猶ほ明徹ならざる感がある。更に助辯を要する。法華經は闍浮提一應化の道ではない、三世諸佛必ず、今佛の説きたまふが如く、之を常説したまふの法であるとするが、其の誇りであるからである。但し諸家の相對門の説をもの足らずとして、絶對門に著眼したるは、祖意に近きものと言ふべきである。

「四に懷興の釋。此の師は相宗の人、大經の疏三卷あり、述文讚と名く。凡そ五徳を釋するは、諸師の義一準ならず。中に於て懷興を引くは、時世、餘師の釋世に流行せず、但だ此の師の釋行はる。今所覽に因つて略して之を引くは、蓋し五徳は是れ此の至要たるを知らしめんが爲のみ、彼の釋能く經意を盡すと爲すに非ず。」と云ふ。

又嘆釋の六句を分別して、「六句の中、初の四句は大經の意、後の二句は觀小二經の意也。初の四句中、初の二句は人法相對にして、如來は是れ能説の人、奇特最勝は是れ所説の法也。乃_五 後の二句は宗體相對にして、上の宗體を承け來る。一乘究竟は宗、連疾圓融は體」等と云ふは、文に應ずるもの歟。

終に「應知」を釋して、「觀小二經の隱影は正しく大經の弘願を彰すが故に、三經一致の大無量壽經なることを知るべしと也。」と云ふは用意周到である。

(如來正覺の文に照して住奇特法を解するよりも、念諸佛耶の文を開いて五徳を釋するが經文に親しきか。)

三 徵

決 卷二の十八

「凡そ三經中、並に出懷を説く。初め大經は今の文の如し、顯著に之を説く。華和の諸師未だ識らず（劍曰く。識らざるに非ず、之を説くの時機到らざるのみ）。我が祖、經文を卓視し、正しく此の文に就いて盛に出懷を談す。次に觀經は即便微笑の文是れ也。彼の文及び疏、並に隱顯有り。顯とは、要門を以て聖道に對するに、猶出懷の義有るが故に。隱の義は化卷本六五に、達多闍世の惡逆に緣つて釋迦微笑の素懷を彰す等と言ふが如し。後に小經は無間自説に就いて、亦隱顯有り。顯とは、不可思議功德の念佛を説くが故に。乃隱は是れ弘願難信の法を示す。化卷本三五に、斯の經は大乗修多羅中の無間自説の經等と言ひ、及び證文十六右の釋等の如し。」と云ふ。此の説佳である。

「六要に云云、義稍疎に似たり」と云ふは、むしろ云はざるが可し。何となれば、一家相傳の説は、口傳鈔等に於て已に之を高顯し盡してある。六要主の知つて言はざるは深淵の湛然たるものである。（自己の見るところ六要よりも高しとするものならば卑むべき態度である）

謙敬院云く「大經は顯露昭晰の經なるが故に、教主の現相を嘆じて影幅表裏と言ふ。觀經は隱顯有るが故に、教主も亦靈山の化儀を没して玉宮に降臨す。小經は一代の付屬なるが故に、無間自説す。」と。是れ亦一著眼である。

大經の文を解するに、「超絶の二字、超世の本願を示現す。」と云ふは可し。又、超の字、大經に廿二字有り、觀小に無し、と云うて之を分別せるは、努力せるものである。

五徳を解するは、上に擧ぐる略讀の説と同一轍である。宗學の漸く明らかならんとする啓運に乗ずるものである。

之を結して、「釋迦、彌陀三昧に入つて、彌陀如來の徳を行するの謂也。」と云ふ（劍曰く。強ひて彌陀如來の徳と云ふの要は無い、教は是れ發遣の使命なるが故に）。

「鈔主、望西二二六左の所引に據るが故に、此の謬を致す。」と云ふ。鈔主は宗學の運を啓くもの、且く準通門あるは止むを得ざるものである。其の別顯門の眞髓を得て之を追へば可なりである。末學が鼎の輕重を問はんとするの態度は誠めねばならぬ。

「出懷の義を示すは、光明和尙に萌し、黒谷大師に顯れ、我が大谷宗祖に於て大成す。」と云うて、廣く諸文を引いて之を解するところ、努力せるものである。師説に據つて、「今宗の聖教、出世本懷を談するに、具に四門有り。一に二教同味門、二に大悲救苦門、三に本教眞實門、四に唯一乘門なり。」として、第一門は「時機を誘引せんが爲の故に施設せるもの也。盡理究竟の談に非ず」第二門は「法門の優劣を言はず、唯だ受行の難易に約す、亦盡理の極談に非ず」第三門は「從本垂末に約す。化卷本十六左云云。末燈鈔三五云云。又攝末歸本に約す。行卷四十四左云云。證文二十三左云云。」第四門は「本末無礙の義、行卷一乘海の引文の如し。涅槃の實諦一道、華嚴の一法一道の文、其の他涅槃、華嚴の佛性の文の如し。」にして、「此の第三、第四の義、前は相對に約し、後は絶對に約するを異と爲すのみ。此の二義は法體の勝劣に終す。是れ正しく出懷を談するの極説也。」と云ふは、宗學の漸く精密ならんとする時運をくものである。

竊かに思ふに、海門國に在つて光雲を瞻るは因地の法門である（入法界品）。眞宗は果分不可説の法門である。一法身の光雲が法界を蓋ふところ、隨色次第而不雜亂（莊嚴歷然）のまゝに皆同一色なるは（本佛の果智のみあり）、謂は

ゆる法、法位に住して（示現法門萬差である）、即ち一實相（眞實功德相）なるものである（示現法門も即ち極樂の廣相莊嚴の波瀾である、盡是法王家の故に）。之を廣略相入妙境界相と言ふ。斯の眞實功德相こそ本願一乘の體であつて、之を願心莊嚴の法門と言ふ。存覺上人が果分不可説の法門とのたまふは、此の謂である。上人には此の卓犖の風光あつて、神解妙釋、時に機情を驚かさず、巧みに之を調機誘引したまふ。謂はゆる名人のものせられたるものである。末學の之を考へざるは崇敬心なきが爲である。（此の説は、華嚴等の示現法門即ち衆道教を盡是法王家の莊嚴として、四修菩薩行の廣相莊嚴と見る説である）。

安養淨刹の外に三世の佛事は無い。即ち修普賢徳である。凡夫より見れば、穢土と淨土の別があるが、佛より見れば、盡是法王家である。之を一名號法とすれば、皆同一色、澆滓清汗の佛智である。之を廣閉法藏すれば、隨色次第而不雜亂の莊嚴相である。散じて八萬四千の法門藏と爲り、凝つて一音演説の南無阿彌陀佛と爲る。若し夫れ此の莊嚴功德が娑婆界に緣起して、機解不同に應ずるところに聖道があるが、畢竟、拔諸生死勤苦之本は、無明を破するの無礙光あるのみである。凡ての法門は、法王城に入らしむるものであるが、超然として獨り法王城に據して、一切の法門を統攝するが見眞大師である。眞宗の學徒、この大觀を得よ。

「又正宗に彼の國の講堂の相を説いて言く、無量壽佛乃至七寶講堂如來出興淨土、道教を光宣し光顯道教妙法を演暢す。乃至心解し得道すと欲拯乃至之利。此れ彌陀佛、化の淨土に於て、先づ方便を説いて機を調へ、而る後に眞實を説く開會の相也。宜なる哉、祖師、講堂を以て方便化身の淨土と爲すや。」と云ふ。

高祖の七寶講堂道場樹を以て化土と判じたまふは、第二十八の願文に、「國中の菩薩乃至少功德の者も、其の道場

樹の無量の光色、高さ四百萬里なるを見見すること能はずば、正覺を取らじ。」とのたまふ中、少功德の者の見るところを以て、方便化身土と爲したまふのである。菩薩の見るところは、廣略相入の妙境界相である、化土として之を見るものではない。天親の見るところも亦然り。七寶講堂と云へば、必ず化身土なりと謂ふは肯じ難い。道教と言へば、必ず方便道なりとのみ解するは誤である。龍樹は「乘彼八道船」（易行品十二）と曰ふ。釋迦如來は此の土に出現して、始めて之を攬つて一應化の道を施設したまふものである。

經に説くところの諸の聲聞、菩薩、大衆は、皆是れ虚無の身、無極の體を得たる聖者であらねばならぬ。即ち如來の大衆衆門である。化土の人は凡夫である、聖者ではない。經文を見るの卒爾なるものか（衆教の指南無くして珍説を吐くものは、必ずしも之に隨ふべきではない。凡て祖典に照して之を決し度いものである。我等も亦未だ此の境に至らず、定めて誤有らん、懼るべき哉）。

四 述

聞 一の十七

五徳を解して、「大寂定とは、彌陀所得の無上涅槃にして、二利圓成を以て其の徳と爲す。」と云ふ。經文に親しからざるもの歟。其の他發揮するところは無い。

五 對

問

記 一の五十一

別に發揮するところは無いが、桃溪に依つて、「是の故に彼の經（彌陀品）に云く、舍利弗、汝未來世に於て、無量無邊

不可思議劫を過ぎて、若干千萬億の佛を供養し、正法に奉事し、菩薩所行の道を具足して、當に作佛することを得べし。號して華光如來と曰はんと。身子尙爾り、餘は知る可し矣。今經の如きは、乃ち一切衆生、唯だ佛願を信ずれば、即ち無量壽、無量光の全を受く。故に分果を取らず、一生にして滅度に至り、彌陀と體を同うする也。嗚呼奇妙なる哉と云ふ。大いに好し矣。」と云ふ。著眼は平凡であるが、眞宗教徒の見通してはならぬところである。法華經の説は三世諸佛常恒の化儀である。之を該攝一乘の華嚴法門より見れば果後の普賢である、即ち蓮華藏界の蘭林遊戯である。

「大寂定は即ち彌陀三昧なり。彌陀の徳に住して彌陀の徳を行するを聞いて五徳を説く。前四住の中、初の一は是れ總なり、奇特の相を現するを以て、奇特の法に住するを知る。謂く、彌陀所得の法は世間に超過して無上希有なり、故に奇特の法と云ふ。釋尊此の彌陀法に住して説くを住奇特法と云ふ。是を總句と爲す。住佛等は、是れ其の別なり。此の中、初の一は是れ定體、後の二は是れ定徳なり。住佛所往とは、本地の内證を佛の所住と云ふ。謂はゆる光壽無量の寂滅海是れ也。今彼の自内證に住するを、説いて住佛所往と云ふ。是を定體と爲す（劍曰く。光壽海を以て所住と爲すは、通相の法身常住の妙理の説を取らずして、願心莊嚴の別途の法門を開かんとするの意歟。苦心の跡は認むべきである。證卷（初）には、「阿彌陀如來は如より來生して、報應化種々の身を示現したまふ。」とのたまふ。應化種々の身は、是れ修普賢徳の聖者である。久遠實成阿彌陀佛の應現とするときは、釋尊の住するところ光壽海である）と見るものであらう。されど寂滅海は涅槃界であるから、經文直に見るときは、三徳は是れ涅槃の三徳とするが穩當か。住導師行とは、已下二種は定徳に約す。住導師行は是れ悲門なり、衆生を開導して正道に達せしむるが

故に。最勝道は是れ智門なり、智慧深入なること等倫無きが故に。此の悲智、乃ち定徳と爲す。已上の四徳、大寂定を開いて所住の徳を明す。總じて之を言へば一大寂定、念彌陀三昧是れ也（劍曰く。所住の光壽、是れ悲智不二の妙果なるが故に、導師行を悲門と爲し、最勝道を智門と爲すか。苦心せるものである。されど眞如に大智慧光明がある、即ち佛智觀照の妙用がある。内に向へば理智不二の法身を顯現し、外に向へば能く一切の無明を破し、導師行と爲る。皆是れ眞如海であるとするに妨なきものである。對問記は導師行の名に著眼し、之を最勝道に對して、自利々々と分別せるか。苦心の跡は認むべきも、異譯の入大寂定に照して、必ずしも穩當なるものではない。略證の説が勝れてゐる。行如來徳とは、如來會に行如來行と云ふ。是を定用と爲す。説法利生の相を現するを言ふ。次下の經文に遵普賢徳と云ふ。是れ二徳に就いて以て二法を表す。謂く八萬の法藏を説くを修普賢徳と名く、因果隨宜の法なるが故に。本願一乘を説くを行如來徳と名く、果海に證入するの法なるが故に。今修普賢徳に簡んで行如來徳と云ふ。一佛乘を説くの相を表す也。」と云ふ。

光闡道教は如來徳の外なるもの乎。行如來徳に始終無き乎。伽耶應現は普賢徳に非ざる乎。普賢徳に始終無き乎。必ずしも然りと斷じ難い。併し始終の増勝に約するときは、記主の分別は一應之を許すことを得るも、再應之を決すれば、十七願力に乗ずるを行如來徳と言ひ、廿二願力に乗ずるを修普賢徳と言ふのである。而して願海も一如である。

六 敬 信 記 卷二の三十一

五徳を辯ずるに、古來の義を羅列して餘すところ無し。而して或師の義として乘誓院の説を擧げ、上來の説の諸義中、此の説を好しとし、深思して知るべしと云ふ。

「今謂く、此の五徳を釋するは、次下に如來速成の五句文有り、此に依つて伺ふ可き事なり。彼の如來正覺等の五句が序での如く五徳に當る。この五徳第一が總、第二已下が別、淨影の總別に同じ。何故に總別と見るなれば、是に三由有り。一者漢吳兩譯には、今の五句を一句として有り、即ち思念正道の一句これなり。是を以て今を見れば、五句を全うすれば一句となる。故に初の二は總也、後の四句は、初の一句より開き出した者也。二者第一に世尊住等と云ふて有り。此の世尊の名は、これ十號の一にして、餘の世尊等の別徳をすべて有る。能住の世尊の名が、世尊等の別徳をすべてあるから、所住の奇特法も、下の四法をすべて有る可きことなり。此れ二の見込み也。又下の速成の文に如來正覺と説くは是が總句也。如來正覺の外に餘法なし、故に總。其智難量の下は、其の正覺の總を開き出したるもの此の五句に應ずるの今の五徳なれば、彼れ總別の故に、今も又總別の五句なる可きことなり。此れ三の見込み也。故に總別を立つと云ふ。

此の説は尙檢討を要する。經文に「住」と言ひ、「行」と言ふは、異譯の入出であると見るが、最も文に應ずるやうである。初一句を總とし、後四句を別とするもの如何。又如來正覺は、釋尊の菩提樹下の正覺である。菩提樹下の正覺と今經の入大寂定と、且く之を分別せねばならぬ。如來正覺を直に住奇特法と見るは如何。如來正覺の文の、其

の智難量にして、一食の力を以て、能く壽命を住すること億百千劫無數無量にして、復た此に過ぎたることを説くは、法身常住の説である。果分不可説の法門は、其の智難量にして、因人の量り知るべきところではない。壽命長遠なるが故に、導御するところ多し。菩提樹下に正覺を成じ、双樹林下に入滅せりと見るは、大乘の機ではない。慧見無碍にして、何者にも過絶せられず、姿色不變にして、光顯異なること無しと説く文である。而して其の然る所以は、如來、定慧究暢して極まり無く、一切法に於て自在を得たりと結ぶものである。必ずしも五徳を別説するの文ではない。一經の所説は、果分不可説を體とせる深意を彰すものである。強ひて五句を五徳に配するは、牽強附會の嫌ひがある（義を運んで配對すれば、何れの文も附會せられぬものはないが、經文は自然のまゝに見るところに、自然の法門が展開せられる。此の處の經文を解せざれば、正覺一念の本佛の果海を説くに、十劫成道の因願果徳を以てせる慧見無礙の義を窺ふことは出来ぬ。若し此の經文を快會すれば、姿色不變にして光顯異なること無きものは、彼の法華經の「常在靈鷲山、我此土安穩」の文も亦此の中に攝歸して、之を華嚴の該攝一乘の法門を以て見れば釋尊の正覺一念であり、更に之を本佛の正覺一念に還して法界莊嚴の相と見ることが出来る、之を本願一乘と言ふ。之を卷けば本佛久遠の正覺の一念であり、之を舒ぶれば三世十方の光海莊嚴、諸佛淨土の因果である。蚊龍の片鱗を見て、其の尋常一様のものでないことが知られる。「以一食之力、能住壽命億百千劫」の文、著眼せねばならぬ。

「さて第一は如來正覺の句に當つ。此れ十八願の願徳。何となれば光壽無量の奇特法を正覺とす。其の奇特たるは、諸佛なみくの正覺に非ず。此の正覺は、若不生者の成じ上つた證にして、衆生の徳を全うするの光壽。依つて十八願酬因之身の佛體也。乃次四句は此の十八願の奇特法より開いて十一、十二、十三、十七の四願の徳を顯す。

(頌曰く、十一は必至滅渡、衆生の證果を誓ふものである。所證の體涅槃なるが故に、佛の所住と云ふも一應は當つてゐるが、十一願は衆生の證果を誓ふものである。十二は光明無量の願である。導師の行に當つるは可し。十三は壽命無量の願である、之を最勝道と云ふは云何。最勝道は菩提の智であり、壽命無量は涅槃の理であるからである。若し理智不二の極談なるが故にと云はゞ、むしろ十二、十三の兩願を提げねばならぬ、牽強附會の痕跡を留めずや。行如來徳の十七願なるは異論無し。)

又入大寂定は果徳に冥合するを言ふ。即ち釋尊の彌陀三昧である。因願と果徳と二而不二であるから、不二門を以てすれば、因願に配するも一理が有るが、二而門を以てすれば、果徳に配するが當然である。此の師の説は、宗乘を以て經文を解したる苦心の跡は認むべきも、尙再應の檢討を要するものである。試みに疑點を要約すれば、憬興の釋に據るに、「如來正覺といふは即ち奇特の法なり、慧見無礙は最勝の道を述するなり。無能邊絶は即ち如來の徳なり。」と云ふ。乘誓院の説は此より來たものであらう。如來正覺を直に住奇特法に配するは親しからず(釋尊の正覺を以て、直に今經の入大寂定とするは經意ではない)。慧見無礙を住最勝道に配するは可し。無能邊絶を行如來徳に配するも可し。憬興の文は、經文の當分に契ふところがあるが、之に據つて五願に配するの工夫は、漸く文義に應ぜぬやうになつて來たやうである。元來經文を解するには經文を以てするが一番自然である。自己の構想を構へて、其中に經文を容れんとするのが、佛教學者の弊であつて、特に從來の宗學者に此の弊が多い。謂はゆる別途不共の法門といふ見識である。

今經文を直に見れば、阿難に對して出世本懷の經を諦聽せしめんとするものに外ならぬ。要するに、佛智不思議智

を疑ふ勿れといふ意である。其の實例を擧ぐるが「一沤の力を以て、能く壽命を住すること億百千劫無數無量にして復た此に過ぎたり。」である。是れは法身常住の功德である。是の故に、今汝が見るところの光顯巍巍の相は常恒不斷である。之を「諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變にして光顯異なること無し。」と言ふ。今日世尊の相好は、但だ今日のみならずと説いて、更に其の所以を示し、「如來は定慧究暢して極り無く、一切の法に於て自在を得たり。」と言ふが經説である。應身の化儀に即して、法身常住の莊嚴功德相を彰し、以て佛智不思議を信ぜしむるものである。(能説の人に此の不思議境界無ければ、所説の法も亦因分に墮するものである)。此れあるが爲に、正宗分に開説するところの本願因果の法門が究竟一乘法であつて、永く顯示三乘の方便を超えたるものであることが窺はれる。

如來會の文は、助顯の爲に引く。五徳を説いて「光瑞希有」と言ふは、我等をして要領を得しむるものである。平等覺經の文を引くも亦然りである。

憬興の釋を引くは、其の宗義を取るのではない。「世尊、世雄、世眼、世英、天尊」の名を釋するは、助顯とするに足る。奇特法を釋して、「神通輪に依りて現じたまふ所の相なり」と云ふのみでは所住の法は明了でない。佛所住を「普等三昧」と釋し、導師行を「五眼」と爲し、最勝道を「四智」と爲し、如來徳を「佛性不空の義」と爲すものは、何等今家の法門を顯彰するものではない。但だ世尊等の名を釋するところは、經文を助顯するに足る。憬興の意は、五徳を以て五名を釋するものである。師は法相宗の人である。眞宗を會せざるは止むを得ぬ。

「爾れば則ち、此れ顯眞實教を顯す明證なり」已下は、六要に科して「是れ總結也」と曰ふ。六要の釋義最も明了

である。

附 言

一應教卷の研鑽を竟つて讚佛の跡を尋ぬるに、進歩の遅々たるを憶ふと共に、學海航路の無限なるを慶ばざるを得ぬ。又六要の含蓄多きを思ひ、末學の構想の紛々擾々たるを知る。六要主は、眞宗は果分不可説の法門であるといふ。華嚴經は因分可説にして、願心莊嚴は果分不可説であるといふ意であらう。本佛の果海の光雲は太空に彌覆せる大莊嚴である。法爾本然の廣闊法藏である。秘密藏ではない。無明の之を覆ふが爲に見ざるのみ。秘密は機の上のみ在る。然るに無礙光の照耀のみあつて能く之を照破する。一乗の體は無礙光であるから、之を果分不可説の法門と言ふ。之を我等に與ふるに本佛の大音說法がある。即ち本願招喚である、南無阿彌陀佛である。三世十方の諸佛の讚嘆の體である。

而して三世十方の諸佛の佛事も、極樂莊嚴に據して之を擲るときは、華光出佛の莊嚴功德相である。本處を動ぜずして十方に到るものなるが故に、法界是れ法王の家ならざるはない。衆生は迷ふが故に迷悟染淨の隔歴があるが、佛は常に圓融無礙の淨土にのみ居したまふのである。一立古今然の報土に居して三世常恒の廣闊法藏を爲したまふも、亦是れ久遠實成の正覺の一念の外なるものではない。

諸佛が之を衆生に與ふるときにのみ、一念正覺を開いて淨土の因果を説くに、衆生の機解に應ずるが爲に、十劫成道の説を成す、恰も太空に即せる鳥跡の空である。之を領解するものは、亦跡空に即して太空を得る。是の故に、圓

融至德（無碍）の嘉號と言ひ、眞如一實の功德寶海と言ふは、其の德を顯すものである。

然れば則ち、一念の金剛心のみ能く正覺の一念と機關相應するが故に、之を大信海と言ふ、信心の體佛智なるが故である。而して法身顯現は、之を安養自然の妙果に待つもの、別願難思の至德である。斯の至德は、之を名號一法に統攝して、諸佛讚嘆に依つて衆生に與へたまふが十七願力である。是の故に釋尊、十七願力に乗じて世に出興したまふが故に、名號を體として、淨土の因果を開説したまふ、即ち大無量壽經である。一經、本願を説くを以て宗要とするは是れが爲である。我等の因果を成就したまふが本願であるから、願因、願果を説くのである。名號を體とし、本願を宗とすと判じたまふは、釋尊能説の大經の上に就いて之を判するものである。而して所説の願海は是れ彌陀の招喚、能説の大經は是れ釋尊の發遣であつて、教卷は發遣の位であるから、出世本懷の經たることを高顯するが教卷の大要であると言はねばならぬ、六要の「略して教旨を標す」と科したまふところに、斯の意が彰れてゐる。記して再考の時を待つ。

419

398

昭和十七年五月三十日印刷
昭和十七年六月五日發行

非賣品

著者 桂 利 劍
神戸市林田區長田町一丁目五四番屋敷

編輯兼 稻 垣 最 三
神戸市灘區國玉通四丁目十三番地

發行人 東邦印刷有限會社
印刷所 高 見 重 太 郎
神戸市神戶區花隈町二九九
神戸市神戶區下山手通七丁目一九二

發行所 法 雷 社
神戸市灘區國玉通四丁目十三番地

終

